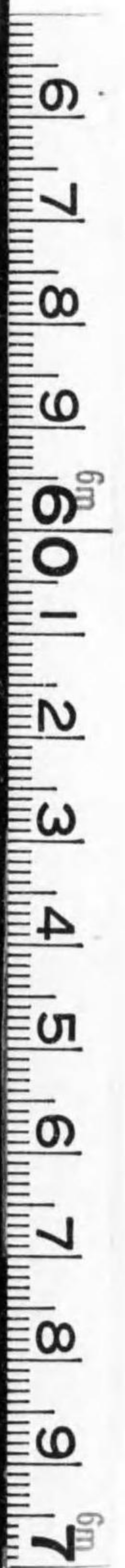


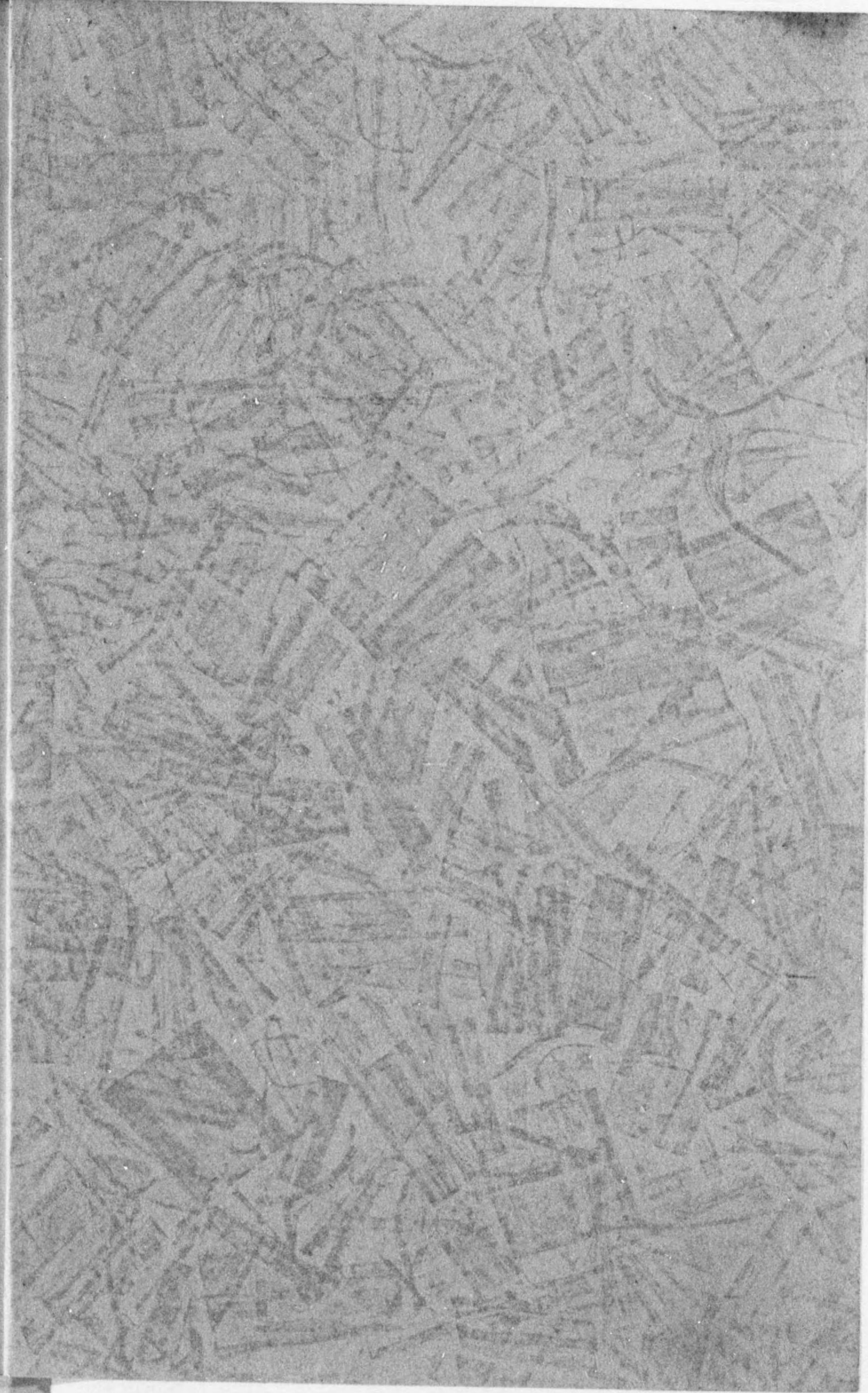
始



特203
308



非常時日本と人物



卷頭謝辭

凡そ人物月旦ほど難ク敷いものはなからう。褒め過ぎても貶し過ぎても變なものになる、殊に僅かな短時日に書きあげたもの充分に材を蒐め得ず的を脱づれた妄評も多からう事と信ずる。平に御容赦を乞ふ、次第不同も却つて此の方が妙味あらんかとも考へた故です。玉石混淆の意味ではありません乞ふ諒察あれ。

著者

序

日本人諸君。吾等が生きる國家社會は今斷崖絶壁を歩んで
ある、將に日本は有志以來未曾有の國難に直面してゐる。誠忠
愛國の眞仁人は起てよ……昭和維新の時は今也。

皇天明示の眞理法に生くの機は熟せり錦旗を奉載して一君
萬民君民一家主義の實を擧げ上下一心億兆一體、眞に世界の
精華たる君民合一、一君萬民、君臣一如を愈々益々強化せしめ
人心革命を斷行すべき秋也。

我國政治の墮落廢敗も社會の混亂窮狀が容易ならざる事

態を招來する恐れあり、然るに之を恢興拾收すべき術も力も無いまでに立ち到つた、この邦家の現状を座視するに偲びざる状態にあり。

國家は政治理想の本質を失ひ民衆は凡て自己の立脚すべき大道を失つてその方途に轉迷しつゝあるに拘らず而かも社會の大衆は舉げて之を覺らず、偶々これを憂懼するものあり、雖も大方禍の根源を正視明察するの能を缺除するか或は各自身上の都合に餘儀なくせられて行詰れる邦家民心打開の術を回らすものなく、又時に估息的手段を講ずること雖も多くその徹底を缺き事績の擧らざることは蓋し理の當然である。

この國家社會の墮落腐敗暗黒昏迷の情勢を徒らに經過推移せしめ事態をこの儘に放任せんか、終には國家に恐るべき凶變の將來あること明白である。吾等は之を深憂するが故に奮然起たなければならぬ、吾等はいくら自己に直接影響が無いからと云ふて少しく社會上の出來事に對して敏感にならなければならぬ、お互に自分等自身のことだ。日本に於ける現今の政治でも宗教でも財政經濟でも乃至文化の程度でも一切の社會現象を有さあらゆる方面から少しく冷靜に眺めて見れば、そこに大和民族の日本、吾々日本人自身の國家がその現状から將來に就いて深刻に考へて見たならば決して凝としては居

られない筈である。

四

徳富蘇峰氏はその近著の中で次の如き事を述べてゐる。

日本の今日の萎靡不振の状勢は要するに國家的、國民的大理想を失へるに基因するものであつてアメリカはドル帝國主義を眞ツ額に翳して一民に世界を席捲せんとしロシアは共產主義の理想を掲げて世界に赤化の雄圖に邁進し支那に於いてすら三民主義の旗の下に自國の再建と對世界關係の改造とに一路驀進してゐるのに、此の間に在つて獨り日本のみ何等國家的理想なきは心細き極みであり、此の際日本國民起死回生の一途は日本國體の尊貴獨特に目覺めて、之

れを世界に光被せんを努力するほかはない。

吾人は此の蘇峰氏の提説に多大の賛意を表せんとするものである。

今日の日本が現在の如き萎靡不振興國の氣象を缺けることは蘇峰氏の正しく指摘するが如く國民がその理想を失へるためであつて理想なき國民の萎縮せざるを得ざること、あたかも船に羅針盤なきが如きである。

而して此の國民的理想として是れが世界に特絶する我が國體の國際的發揮を擇び來つたこともまた誠に正しい政治の墮落腐敗、社會の混亂は日本と云ふ大なる國家社會がしたなら

ば誠に泡沫にも等しいものである。さりながら邦家の危急に對する共同責任を痛切に感じ茲に泣いて同胞に訴ふるものがある。されど吾等は自己の爲めに世に求むべき何物もない、たゞ國運民命の歸趨する所を凝つて視詰めて來て最早我慢が出来ぬ。

斷崖絶壁の突端に歩を進めつゝ而もそれを覺らざる瞽盲の日本民衆よ、座視して憐れ亡滅の悶へ見るよりは、若かず、大聲叱呼して倒るまで戦はんにはこゝはわれらの血叫である。

今や我が日本人は世界的地位から謂ふならば、將に有色人種の盟主としての大自覺に立脚してやがて世界全人類安寧幸

福への曉鐘をつき鳴らさなければならぬ大切な任務を持つてゐるのではないか。

日本人諸君。人間が世に立つて個人としての成功と失敗、之れも輕視してはならぬ至重な問題である。さりながら自己の生きる國家社會が滅亡的危機に頻して居て、一身一家の富貴顯榮が何になるか、速にその無明昏黒の暗より醒めて、人の世の最高理想へ共に突進しやうでないか。

眞實に國を憂へ、大和民族に對して偽りなき慈悲心を有し愛國の爲め血を燃すものは起て、日本をして亡國的危殆に陥るものは赤化左傾の世界的思潮にあらず、社會主義にあらず

無政府共產主義にあらず、斯る片々たる跛行思想は大國家的正義の鎧袖一觸のみ。

吾等は進んで國家に多年醸生されたる虚偽と無稽の真相を明らかにせねばならぬ。

速かにその色眼鏡をはずして、國家的重症の眞實情を正診凝視せよ、日本が悩みつゝある病症は實に中樞神經の麻痺症こそは、

曰く、國の立法府を組織する上下兩院に於ける議員の破廉耻無能と我利我慾である。

曰く、官吏の無責任にして私利を營み自己の職責を忘却した

る祿盜的醜類の愈々多きを加ふること。

曰く、上皇室より特別の恩澤に浴する華族階級が大方は自己の大切なる地位と責任を忘却し醉生夢生的輩が充滿してある悲しむべき事實。

曰く、實業家又は事業家と稱する輩ら私利私福に吸々として眼中國家社會なく財界を顧みざること。

曰く、文教の府には一點晃々たる指導の方針なく昏亂錯雜その極に達せる思想の統一も取締も全く無能なること。

曰く、高等學府は公私立共に不統一紊亂せること。

曰く、人に安心立命を説くべき宗教々團は悉く腐敗墮落して

最早有害無益の觀がある。

枚擧するさへその繁に堪へないが概ね斯の如き始末である
内治上らず外交振はず財政乏しく民に生活難ありて、實業
興らず上下交々利を貪ぼりて飽くことを知らず眞に餓狼の群
と選ぶ所はない。

噫々我等の日本をして斯くまで混亂危態に陥らしめた、こ
の病原菌が何れにあつたか之れによつて明らかになつたであ
らう。要するに吾等大和民族の光輝ある日本國家に外部から
侵入する幾多の黴菌がある。内部から發生する各種の毒素が
ある。これぞ是れ邦家病弊の原因を作するのである。外來の

黴菌は恐るべき繁殖力を以て侵蝕し内に發せる毒素は刻一刻
その悪作用を發揮して止まぬ、内外相呼應して、この國を蝨毒
してゐる。されど多くの同胞國民は、この國家的大難に向心
づかぬ、何故に心づかないのか。

それが恰も痴漢が毒酒に狂醉せるが如くこの恐るべき黴菌
と毒素とに侵蝕されて、己に既に暈醉の状態に陥つてゐるか
らではないか。

眞實我等と憂を共にする熱血の同胞よ！日本現下の疾患は
叙上の如く人の風上に起つ人々が口に高言を吐きながら、誠
に國家觀念なく崇高絶對の大日本國家的信念の缺除してゐる

ことである。

而して一方未練の民衆が無自覺、無反省にもあやまれる彼等の甘言誘惑に引掛つた結果に外ならぬのでないか、良樂は口に苦く忠言耳に遡ふ、されど文王は言はずや『仁人は能く直練を受けて至情を悪まず』と。

吾等は唯だ國を愛し、同胞の前途を杞憂するが爲めに敢て直言するものである。起てよ、而してこの非常時に赴かうではないか、この憂ふべき國家の危急を自ら救濟せんとするには果して如何なる方策を回らすべきか。

明治維新の元勳大西郷翁は偉人であつた、翁は生命もいら

ず、名もいらず、官位も金もいらぬ人間程始末におへぬものはない。然しかゝる始末におへぬ人間こそ眞に大きな仕事を爲すものであると喝破された、至言でないか。熱血至誠の同胞よ我等の此所に提唱する、日本國家の非常時に際して。

眞實生命もいらず名もいらず官位も金もいらぬ熱血赤誠の士が山川草澤に蹶起することのみである。

我れこそと思はん人士は奮然として起てよ、されど心事に一點の混濁があつては駄目だ、それぞ日本に昭和維新の大業を爲すべき卵子である。烏合の集團ならば百千萬あると雖も蛆蟲の蠢動に終らんのみ。

日本人諸君。

鐘が鳴る。

鐘が鳴る。

奮然として起てよ、英雄出でよ、ぬツと立ち上つて非常時祖國を救へと曉鐘がけた、ましく亂打されてゐる。非常時國難とは何にか、英雄の出現を待望する民衆の鬨の聲である。

世を慨し國を憂へて山川沼澤に雌伏せる蛟龍の傑士は一舉にして奮起するここが刻下日本の最急務である。

日本人諸君。

鐘が鳴る。

鐘が鳴る

余はこの人物待望の民衆の鬨の聲に應へるべく常に國家、社會正義の爲め健闘され國民の典型であり、而して亦現時青年子弟を目的とする立志傳、成功談等に關する刊行物を見るに、其の多くは熱血氣銳の青年を煽動して一身を誤らしむるものならざる莫く。

害多くして益少きを慨し後進者をして自己の出所、境遇、志望に應じて執るべき徑路を示さんご欲し、青年の最も印象の深くして且つ感化力の強かるべき其人格、其富、其事業、其家柄、其力量、手腕は光芒萬里を照らす人物を傳評し後進子弟の

訓育の資する處あらんご欲し併せて諸士の功績と名譽を不朽に傳ふるの料ごして本書刊行したる所以である。

復見よ、目を止めて行き暮れて寄る蔭もなき河原の石を枕にするルンペンをア、瘦影梢然誰れか悲惨ならずごせんや。

聲望並び高く榮耀一世に輝く貴顯紳士をア、成功の士誰れか亦羨仰せざらんや。

抑々人生の行路や一起一伏その徑路には幾多の障害物横たわつてゐる。

人もし之に躓かば倒る、倒れて起つ能はずんばルンペンごなつて已む、倒れても又起ち上つて進む者獨り成功す、貴賤

貧富千里相隔つるの現實は茲に存するのである。

宜なる哉、失敗は成功の基なりご、夫れ然り殷鑑斯の如く明白なりご雖も、若し我に向つて失敗に處し如何にせば成功するやご問ふ者あらば余は得て之れに答ふるの資格なし。

唯だ夫れ克く答へ得るもの成功の士あるのみご答へるのである。

本書に登載諸士の評傳は先輩諸氏が各金玉の文章ありて何れもあやめご咲き亂れ恨むらくは余は文章を修めず文字を知らず余の文章の如きは固より人に示すべきものにあらざる事は余も之を識つて居る。元より其の器に非ず折角に玉璧を得

て瓦石となすなきかを、心窃に恥ずるものである。

一八

昭和十年盛夏

伏猪城下にて

原 静 村

非常時日本と人物

目次

松波仁一郎氏	一
寺田甚吉氏	五
高岡隆心師	一三
種田虎雄氏	一九
松井輝三氏	二五
渡邊綱五郎氏	二九
濱恒次郎氏	三三

谷口豊三郎氏……………三七
 有田邦敬氏……………四一
 松下幸之助氏……………四五
 楠部敬一郎氏……………五三
 麻殖生徳次郎氏……………五五
 島田誠三郎氏……………五九
 兒山保之氏……………六三
 田中正治氏……………六七
 西風重遠氏……………七一
 武本謙吉氏……………七五

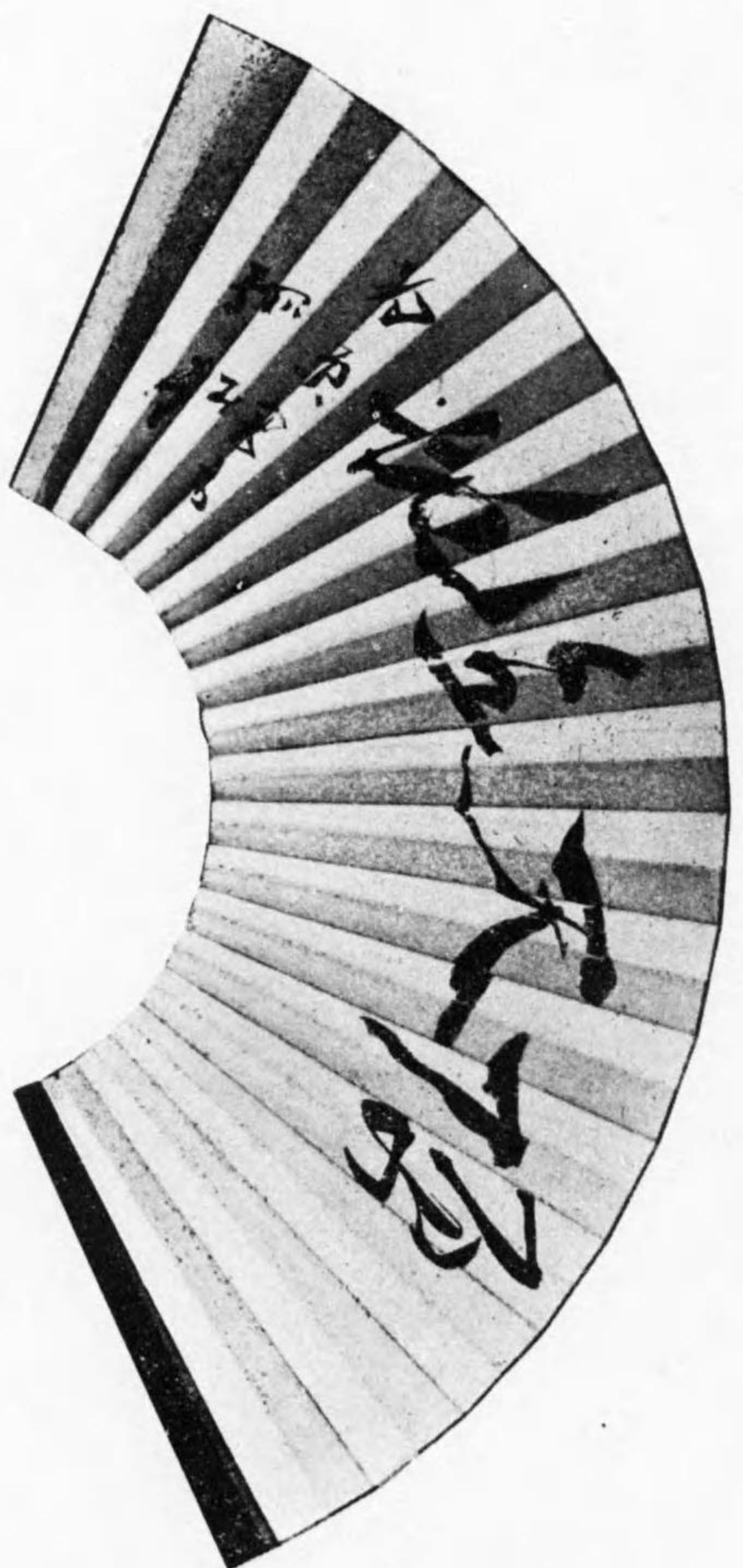
井阪平一氏……………七九
 山本政太郎氏……………八一
 松永定一氏……………八七
 十場吉太郎氏……………八九
 上山英一郎氏……………九一
 上山勘太郎氏……………九九
 左納利一氏……………一〇三
 今西與三郎氏……………一〇五
 岡本市治郎氏……………一〇九
 溝淵春次氏……………一一一

西田貞亮師	………	一一五
次田虎雄氏	………	一一七
大矢寧明氏	………	一二一
中山定次郎氏	………	一二五
村垣彦次郎氏	………	一二九
川口義宏氏	………	一三三
池澤原次郎氏	………	一三七
高津慶次郎氏	………	一四一
山田久太郎氏	………	一四三
吉田卯之吉氏	………	一四五

川村謙吉氏	………	一四七
安藤正純氏	………	一四九

持法
 時下傳名之
 會如亦法之
 不知者後也
 今回香少可寄之
 遠歎望山之
 得之具照不
 難想惠賜之
 事增恩德之
 入感謝中上
 副包記念之
 笑面經下
 在不知名之
 檢如新也
 政身
 高野山
 寺之
 原攝村先生
 松木

(信書のへ者著りよ師心隆岡高 長管 宗言眞義古)



(書しれらへ興に者著日當選當長議が氏松國川濱長議院議衆)

松波仁一郎氏

法學博士東京帝國大學名譽教授
東京市牛込區仲町

世界的の學者、海法學の最高峯法學博士、松波仁一郎氏は明治元年一月一日岸和田市並松町に生まる。由來泉州人は協力一致團結の思想に乏しく身を他府縣に寄する者は毫も郷里を顧みず、而して在郷の士は郷土出身者の姓名すら之を知らざるもの多く、隨て其の間殆んど交渉なく、聯鎖なく、協合なし。されば又先輩と後進者との間も疎隔甚だしく、之を他府縣人に於て見るが如き兩者の間に指導敬徒の美風存せざるは吾人の常に遺憾とする所である。

殊に岸和田市出身の士に至つては地方を顧みるもの甚だ少なく、甚だしきに至つては教育家を以て任じつゝある人にして祖先の展墓も閑却して居る人物がある。之等は文部省が祖先崇拜せよとの訓令に反するものではないか、今地方人士の言を聞くに學問すれば土地に居らぬ、親の墓も顧みないやうになるから、學者にはしないと云つてゐるものもあると云ふ風である。是れを以て見るも地方先輩の感化程世に恐ろしきものはなく、一體愛郷心のないものは愛國心のないものである。教育も此處に至ると亦危険なりと云はねばならぬ。

然るに郷土の大先輩法學博士松波先生が身は高位高官日本の最高學府の大先生であり、而も世界的海法學者として全世界に鳴り響く、先生は常に愛郷の爲に熱血を燃やし東京と岸和田を往來し市政の爲めに産業經濟の爲めに將た亦人物養成の爲めに總ゆる指導啓發をされ郷黨の爲めに盡瘁せられたこと眞に擧ぐるに遑まらず、實に松波先生は岸和田市の大恩人たるのみならず、又以て當代の師表後世の軌範たり。吾等郷人愈々その盡孝報恩の大思想と盛徳を欽仰して止まないものである。

終りに臨みて先生に一言お願して置きたき一事がある。夫れは他事でない、先生はより多く歸郷せられ岸和田人士

を精神的に指導してもらいたい一事である。

岸和田は依然として低級なる趣味を喜び、依然として公德心なく、公共心なく、依然として風俗人情は輕浮を極め依然として個人主義の弊を脱却せず、藝妓買ひと空威張りと、鍍金細工の俗臭紛々、不謹慎極まる人物が横行し遂に物質文明の積弊の窮極する所に到達するのではなからうか、吾人は此の想像の杞人の憂に終らんことを希望して止まないのである。然し審に現代の岸和田を觀て其の將來を察するに物質文明の大いに發達すべき千百の理由を觀ると、未だ精神的文明の將來を樂觀すべき一の兆候を認めないのである。之が救濟策として博士が常に高唱される教育機關の完備に俟つの外はなく、之れに依りて精神文明の必要を悟らしめ、岸和田紳士をして岸和田の現代精神の缺陷を自覺するの素養を得せしめなければならぬ。

然らば精神文明を高唱し岸和田紳士の精神的向上の大指導者として何人が適當であるか、現在の岸和田を見渡すところ残念乍ら適任者が無い。財界人としては天下の富豪勤行力行の權化寺田甚與茂、寺田元吉翁等が世に在はずときは岸和田の大御所として八方に睨みを利かして居たが兩翁亡き今日は全く群雄割據して偉いもの勝ちの状態である。

此の意味に於て岸和田の御意見番、大指導者として博士が言はるることには市民の何人と雖も毫も異存はない、異存どころか益々繁く往來して岸和田の蒙を啓いてらいたいとは四萬市民熱望して止まないところである。

博士の産神岸和田市菅原神社境内に昭和三年三月母公の報恩の爲め建設された報恩碑の碑銘

報恩碑表の碑銘

報 恩

東郷平八郎書

報 恩 碑 裏 の 碑 銘

松波先生ハ明治元年一月一日並松町ニ生マレテ幼キ頃父ヲ失ヒ慈母ニ育テラレマシタ明治十四年岸和田小學校同十九年京都同志社英學校同二十三年第一高等中學校同二十六年帝國大學ヲ何レモ首席デ卒業セラレ同年法典調査會補助委員トナラレマシタ明治三十年歐米ニ留學同三十二年倫敦ニ又三十三年巴里ニ開カレタ萬國海法會議ノ副議長ニアゲラレ歸朝後東京帝國大學教授トナラレマシタ明治三十四年法學博士ノ學位ヲ授ケラレ同四十二年商法取調委員トナリ昭和二年四月勅旨ニ依リ帝國學士院會員ヲ仰ケラレ今ハ從二位勳二等デ日本全國教員二十數萬人ノ筆頭デアリマス本官ノ外日清日露ノ戰役ニハ内閣及ヒ陸海軍省ノ顧問トナラレ手柄ガアリ又十數年間續ケテ文官高等試驗委員ニナラレマシタ民間ノ職トシテハ現ニ海軍協會及ヒ港灣協會ノ副會長海防議會監事等ヲツトメテキラレマス先生ハ幼少ノ時カラ母ノ教ニ依リ當産土神ヲ信仰セラレ常ニ報恩ノ誠ヲ致サレマシタガ茲ニ其微意ヲ表ス爲トテ此碑ヲ建テラレタノデアリマス

岸和田尋常小學校第六年生作文竝ニ謹書

昭和三年三月

帝國學士院會員從三位勳二等法學博士松波仁一郎建之

寺 田 甚 吉 氏

南海鐵道株式會社々長
兵庫縣武庫郡精道村

西日本の富豪を語るもの、先づ指を必ず寺田家に屈す、而して當主寺田甚吉氏が果して如何なる人物にして如何なる性格を備ふるかは苟くも寺田家を知らんと欲するもの、齊しく聞かんと欲する所にして、試みに之を縦より觀、將た横より、上より、下より觀て、所謂縱横無盡に論評するは極めて興味深き事なるを信じ、則ち茲に吾人の眼に映じたる、天下の富豪寺田甚吉氏を拉へ來りて、滿天下の人に縱横解剖の刀を下さんとす、現實に一億の富を有し、寺田家の總頭領となり、威望二つながら兼ね備へたる、所謂天下の大富豪寺田甚吉氏は果して如何なる人物乎、一言にして之れを盡せば、氏は「富豪としてその本分を完全に盡す人なり」

天下の富豪寺田甚吉氏

天下の富豪と言ふ肩書は名譽の表章なりと思惟する榮冠よりも人物其ものには一層大なる輝きが潜んで居る、蓋し富豪や會社の社長の如き、必ずしも氏一人の占有物にあらずして他に幾らも其類がある、況んや富其物は必ずしも名譽の源泉なりと限つたものにあらず、反つて之が爲めに没却して顧みぬ富豪も多い世の中である。

大資本の會社社長も亦時に天下嘲罵の標本的たることがあるではないか、されば富豪たり又社長たることが必ずしも其人物を褒貶する標準とはならぬ、唯富豪にして富豪たるの本分を解し社長にして社長たるの職責を辱かしぬと言ふ者に於いて始めて其人物を稱すべきである。

然れども富豪にして富豪の本分を盡し、社長にして社長の職責を全ふすると言ふことは因より當然のことで、之れ

を以て特に其人物を稱揚するには足らぬ、而かも此の當然のことを全ふするものが甚だ勢きを思へば實際世の中に人物の少なきことを知るべく隨て其當然のことでも之を全ふするものは偉い、人間と謂はねばならぬ。

況んやそれ以上のことを爲すものに於いてをや、一帯我が國の人は富豪になると人間は網て凡化するやうな傾向がある、是れ蓋し富豪なるものは悉ゆる物質的の慾望を充たし得る地位にあるを以つて自ら安逸に耽り遊惰の民となるか或は其富の擁護に専心し愈々益々慾望を増大にして自己の營利のみに汲々として殆んど他を顧るの餘裕を有するものなく、富豪の本分とか社會公共の爲めなどと言ふことは其念頭に起らぬのである、隨つて益々凡化する而已で、富豪に人物なし言ふは洵に所以なきに非ずである。

試みに今日世の幾多の富豪に就いて觀るに其家門の内には黄金の光りは放つて有るも富豪其者の人物には毫も光りはない、然るに世人の多くは黄金の光りを見て直に富豪者たる人物の光りと爲すやうであるが、是れ謬見の甚だしきものである。

即ち今日の富門豪家と稱せらるもの中より黄金の光を除き去つたなれば跡は即ち暗黒にしてゴム人形同様である、蓋し富門豪家始めより英才生れざるに非るも黄金の權勢に眩惑し爲に非常なる英才非凡なる傑士に非ずんば其向上を害し進歩を阻止せられ、其人物をして大ならしむることが出來ぬ結果である。故に若し富豪にして其有する富に眩酔せず其人物を向上ならしむると共に自ら放つ其事光りが黄金の光りに打勝つと言ふ人物あれば夫は非常なる英才、非凡なる人物であると思はねばならぬ。

今寺田甚吉氏を観るに氏が富豪としての地位は因より關西に於いては大なるものである、けれども氏は決して富其ものをば左様に有難いとは思つて居らぬ、唯だ我が家族制度より一家の家長として亦父祖に對し子孫に對する義務として其富、財産を理むることに怠らぬと同時に氏の頭にはヨリ一層國家、社會と言ふ觀念が充溢して居る、隨つて世の富豪が或は無意義の生活をなし、或は唯だ私利私慾に汲々として殆んど他を顧みるものなき時に當り氏は國家を思ひ社會のことを考へ郷土岸和田の振興とヨリ良き大岸和田市建設の高遠なる理想を辿つて一面には思想家ともなり又實行家ともなつて其人物は絶えず向上して止まぬと言ふが如き、氏は決して尋常一様の人物でないと言ふことが解るであらう。即ち某人物は氏の財産よりも遙かに以上であることが判る。尙ヨリ一層切實且つ具体的に氏の人物に就いて評論するの自由を得さしめよ。

個人として の寺田氏

物に利弊の伴ふが如く、人には亦長所もあれば短所もある這は如何に英雄豪傑でも又は大人物でも到底免れぬ處である、今寺田氏を観るに。氏は頗る長所に富んでゐる、加之、其手には大なる富を提げて居るから些々たる缺點の如きは縦へ之ありとするも蔽はれて人の注目を惹くに足らぬやうである、そこで氏に親しむもの、氏を評する言を聞くに唯氏は偉いと言ふ、何が故に偉いかと問へば氏は富豪なるを以て偉いと言ふに歸するやうであるが、之では毫も偉らうと言ふ理由はなつて居らぬ、常眼凡腦を以つて到底人物が判るものではない、余を以つて觀るに氏は頗る民衆的

の人物で人と隔壁を設くるやうなことはない、而して氏は最も自信力の強き人物である。隨つて常に無遠慮に自己の意見を率直に發表して憚らぬと共に又之を行はんとするに常に少しも掛け引がない、掛け引のない處、時に或は露骨に見へ、亦無遠慮にも見へることがある。故に表面のみを見るものは或は誤解することがあるかも知ぬが、併し之れを誤解するのは見るもの、眼識がないからである。

氏は實に氣宇廣潤なる人物にして世俗の小事には餘り躑躅せない而して成ることがすべて直情徑行で少しも飾ると言ふことがなく頗る自然的である。

寺田氏の性格

氏は大膽にして而かも細心、聰明にして而かも沈毅穎達にして而かも宏量、先見の明、着眼の鋭、飽く迄大事を遂行するといふ勇氣と苦節を備へ、苟くも一度劃策したる事は中途にしてドンナ障害があつても敢行せねば熄まぬといふ、いと頼もしき活き／＼した精神をその渾身に漲らしてあるものは甚吉氏である。亦至つて平和な人である、而して極めて徳素を重んずる人である。其の術はず、誇らず、非義を悦ばず、非禮を行はない所謂氏が篤實、篤行のうちに人を愛するといふ美德がアリ／＼と現はれてゐる。

氏が人に勝れたる愛國の熱誠も又善事に向つて敢爲邁往の美質は至愛至仁の美德から轉化した處の醇汁に過ぎない古人は愛を以つて衆徳の最だといふた。愛は何故に夫れほどに尊いのである。愛は不朽的のものである、決して改

易的のものでない。之れと同時に愛は絶対的のものである。更に不變的のものである。天地が壊はれ人類が減びても愛は決して壊はれない滅ばない、ソノ如く至愛至仁の人は不朽の人である。不變の人である。

又平和を好む人は愛の至情の溢れた人である、如此の人はドンナ場合にも餘裕がある、恒に心が平かである、即ち死に臨んでも樂に居ても苦に處しても仕事の時も遊ぶ折も食事の際も若くは又朋と語り人と談する間にもコセ付かないで應揚な何んとなく靜かにユツタリとした處がある。而してかゝる人こそ果して其容貌に至るまで寛厚の同情と平和の波とを湛へてゐる。

而かも寺田氏は確かに其のタイプの一人ではないか、然り寺田氏の容貌は恒に平和の波を漲らしてゐる。甚だしく自得したる人間として満面悉く之れ平和の神が旅宿、宮殿のやうである。福澤桃介氏は嘗つて氏を評して曰く「寺田氏は人物も大なれば隨つて其の器も大である、氏が胸中恒に無限の平和を湛へて紆徐迫らず綽然として餘裕のある處なきは大阪に於ける青年實業家第一等の人物である。而かも氏が平和の源より湧沸する無限の愛嬌は亦巒然掬すべき風趣がある、之は決して他に匹儔見ない氏の天品である。」然り福澤氏のいふが如く氏の平和と盛徳は氏の天品である。即ち天品であるが故に自然である。氏は決して平和を衒ひ有徳を虚飾する人でない、氏は此の點に於て確かに萬人超卓せるものである。

抑々日本の富豪と歐米の富豪と對照したならば全く正反對でとても比較にならぬ、歐米の大戦に際しても英國あたりの貴族富豪が政府に金を提供し、國家の大事を各自の双肩に負擔する意氣を示して居たことは、とても日本人の想

像にも及ばぬ所である。彼等の多くは其政府が課税の少ないことを心配し、何故に更に多く取つて國家の爲めに費さないかと言つたことがある、之れを往年の日露戦役に際して政府が公債を勧誘しても仲々容易に應募を諾しなかつた日本の富豪に比較すると如何に是を恥づべき者ならざるかを知ることが出来る。

最近に於ても昭和六年滿洲事變に際しても亦然りである。暴戾な支那人に我等の表徴日の丸の國旗が蹂躪されても彼等資本特權階級は血を燃やさない、零下四十度の朔風漂々として面を刮り滯寒凜々として指を墜す北滿の曠野に皇軍の權益を護る爲めに戦を續ける我が勇士の慰問の聲は全國津々浦々熱火の如く燃上り、可憐なる一小學校兒童も起つて皇國萬歳を叫び、大和撫子らも血書を認めて看護婦を志願し、又宿場女郎に到る迄、貧者の一錢を眞心と共に眞に舉國一致忠烈正義の士を慰問したが彼等貴族富豪階級は知らぬ、存ぜぬ振りをしてピタ一厘も慰問しなかつたことは實に非國民、非人道的に良心を自段されてゐたのである。

彼等今にして覺醒せなければ全く取りかやしのつかぬ破目に陥りはしないか、世界の歴史の中に革命的の事情の多くは貴族富豪と政權の壓迫に反抗して其の槍玉に上げられたものは横暴なる富豪と貴族であつたことを彼等は考へなくてはならぬ。

日本の富豪は富の乞食、富の囚奴、富の非道者を以つて甘んずる傾きがある。即ち彼等の懷中は恒に豊かに其の倉庫は財貨を以つて盈されつゝあるも彼等の心には平和が宿つてゐない、至樂の何物たるかを解せない。ゲーテなどいふ事がある「富の何物たるを解せずんば以つて富者たるを能はず」寺田氏は此の惡流の富豪と大に撰を異にして

る。氏は慈善と公共と國家の爲めには喜んで金錢を捐つるの義心もある。而も此の義心は絶へず氏の肺腑を燃やしつつある。氏の理想は富豪として其の本分を出來得る限り竭したいといふにある。之れを詳言せば富の後世に遺すべき土産として其の富を及ぶ限り善用するにあるのだ。更に換言せば後世に傳へて以て燦然飾るに足るべき一大土産を遺物としたいといふにある。富の善用的最後の目的は宛らクロムウエルの世後に英國を遺しワシントンの米國を遺したと同一である。氏など慥かに此の理想の一人ではあるまいか。

寺田氏の其の性格は卒直にして剛毅、人に對して城府を設けず又能く部下を愛す、氏が會社に出勤するや如何なる微賤の業に従ふ一勞働者に至るまで會へば必ず殷勤禮を返へす、會つて吾人は或時戯れ「是れ君が人望日に隆き所以也」と言へば氏は笑つて曰く「何も吾輩は彼等に向つてお世辭をいふ必要はないが、さうかと言ふてお世辭をする位いで人心を收獲することが出来るものではない、吾輩は只人間として禮を返すに過ぎない、彼も我も同じ人間である以上互に相當の禮儀あるべき筈である」然り氏が如何なる場合にも「人間本位」若し黄金萬能主義の日本の富豪が亡びたる時は正に寺田甚吉氏が大平を謳歌する時であらう。吾人は氏の人格を推量す、氏は飽迄大にして慈眼仁腸である、氏の益々富まんことは獨り吾人の祈る所ばかりでなく恐らくは一般貧者と雖へども又之を祈るものである。貧者をして益々富まんことを祈らしめよとは之れ天來の聲である。苟しくも氏をして此の聲を發せしむ。之れ富者として其の義務を果し本分を竭すに於て遺憾なきを致すからではないか。寺田氏に就いて猶詳しく論すべき點もあらうが氏の眞面目は如上の評の中に委されてゐるだらうと信ずるから此位に筆を擱くことにする。

高岡隆心師

高野山
古義眞言宗管長

凡そ世に社會人生を濟度せんとする宗教家の天職は實に崇高偉大なるものである。然るに今日の宗教家程其崇高偉大なる使命と天職を辱かして居るものはなからう。彼等は口に衆生濟度を説くも多くは偽善である。

蓋し宗教家の眞面目は至大なる信仰力に依り始めて發揮し得らるなれ。未だ自ら信仰の力なく熱も光りもなき、寺院の俗権を以て人を濟度し、世を救はんとするが如き因より望み得べきことでない。然るに今の宗教家は多くは斯くの如くである。去れば世は擧げて濁り、世は擧げて醉へる今の時に當り獨り澄み、獨り覺めて人の靈性を救濟すべき彼等は反て自ら濟度を受くべき情態に陥入り、口徒らに偽善を唱へて實は放逸淫縱至らざる莫く、或は權力名利の爭奪に日も亦足らぬと云ふ有様。錦衣緋衣の高僧も權勢を漁つては佛法の主旨を忘れ、學問はまた盛んであるが、靈火的の信仰あるものは少ない。

一山に貧慾の魍魎が横行して我佛教の末路は方に爛熟の頂點に達し腐敗の徵候は續々として現はれ、勢ひ人心は動搖して思想界の混亂今日より甚しきは莫い。

此時に當り佛教家中に於て其靈火的の信仰を有し、又其人格的感化力も大にして、能く信徒を嚮導し、天下の人心を歸向せしむるに足る、多くの宗教家を壓し富士の秀嶺の如く天に冲す、高僧は古義眞言宗管長高岡隆心師の如きは正に其の一人であらう。師は昭和九年高野山金剛峰寺に於て行はれた管長選舉に千投票八百六十三票のうち千七百九十五票の絶對多數を以て當選せられた、師の如き有徳崇高にして靈火的信仰を有する高僧が一宗一派を超越して萬民信仰の中心である古義眞言宗管長に就任されたことは欣悅に感ずるものである。

高岡隆心師略歴

- 本籍 和歌山縣伊都郡高野町大字高野山準大本山寶壽院門主遍照光院兼務住職
- 出生 慶應二年十二月十五日生新潟縣中頸城郡保倉村大字青野瀬下清兵衛二男
- 學歷 明治十六年四月十三日高野山中學林卒業
- 同 廿三年八月十一日眞言宗古義大學卒業
- 住職 同 廿六年七月四日高野山準別格本山山平等院住職
- 同 廿九年七月廿二日別格本山明王院住職
- 大正九年三月廿五日準大本山寶壽院門主當選就任
- 昭和五年三月廿二日遍照光院兼務住職
- 寺門興隆 明治廿六年任職就任以來平等院明王院成蓮院遍照尊院一乘院等各寺門ヲ興隆ス
- 教務 明治廿四年五月一日眞言宗古義大學林準教師拜命以來現時ニ至ル迄教育ニ從事ス
- 大正十一年三月一日高野山修道院長就任
- 同 十三年三月廿六日眞言宗高野山大學長就任
- 同 十五年四月二日高野山大學長就任

山務

昭和七年二月十九日古義真言宗勸學寮阿闍梨ニ就任
 同 八年四月八日高野山大學部々長兼任
 明治廿九年七月十六日真言宗々會ニ對スル本山協議員拜命
 同 卅年二月廿六日本山集議ニ當選就任三回
 同 卅年六月十三日高野山中學事務員ニ當選
 同 卅二年二月廿七日金剛峰寺教議所會計課當選
 同 卅三年九月十九日金剛峰寺教議所庶務課兼興隆會庶務課當選就任四回
 同 卅三年一月十日高野山々林課當選
 同 卅六年八月廿九日本山常置員會議員當選就任三回
 同 四十二年十月三日本山評議員會議員ニ當選就任二回
 同 四十五年七月十三日金剛峰寺顧問會顧問ニ特任
 大正十年六月高野山住職會議員當選就任
 同 十四年一月十九日金剛峰寺留學生貸費生詮衡委員ヲ囑托就任
 昭和三年三月十日御遠忌參與任命
 同 四年五月廿日高野山内協議員任命

宗務

同 五年二月廿五日伽藍復興協議員囑托

明治卅四年十一月一日真言宗高野派宗會議員當選就任二回、同四十一年十二月三日真言宗大中學科
 目ニ布教料實施法詮定委員、同四十二年三月十五日真言宗各派聯合高野山大學勸財學團評議員、同
 四十四年十二月七日真言宗各派聯合大中學財團監事、大正四年九月廿三日真言宗各派聯合宗會議員
 ニ特選、同八年五月十二日真言宗法議調查會顧問、同年六月二日真言宗學階評議員拜命四回、同十
 三年四月一日真言宗高野山大學評議員、同十五年九月十七日真言宗高野山勸學財團理事、昭和二年
 三月七日古義真言宗總本山金剛峰寺耆宿補任、同六年七月十日留學生及貸費生詮衡會員特任、
 明治廿七年十月十四日日本赤十字社終身社員、同卅四年三月日本武德會々員、同卅五年五月日本風
 俗改良會々員、大正十五年十二月一日古義真言宗社會事業協會名譽會員、

定額位

大正六年十二月廿日東寺定額僧當選、

僧階

大正十一年四月五日權大僧正補任

學階

大正十五年九月七日碩學補任

宿老

昭和九年三月廿一日古義真言宗宿老特補

賞

大正九年八月十一年高野派管長大僧正土宣法龍師ヨリ教育上功勞ニヨリ小五條ヲ褒賞受領ス
 大正九年十月卅日高野山大學總理大僧正土宣法龍師ヨリ多年教育上ニ盡瘁シタル功勞ニ依リ賞品受

領ス

昭和三年十一月十日國家ノ慶事ニ際シ多年宗務ニ盡瘁シタル功勞ニ依リ古義眞言宗管長大僧正龍池
密雄師ヨリ表彰賞品受領ス

同御即位式御大禮ニ際シ教育功勞ニ依リ桐花御紋章附硯石箱一個ヲ文部大臣從三位勳一等勝田主計
閣下ヨリ表彰拜領

同御即位式ニ方リ昭和三年十一月十六日饗饌ヲ賜旨宮内大臣一木喜徳郎閣下ヨリ案内ヲ拜ス

天皇陛下 昭和四年五月廿三日大阪行幸二府五縣ノ大中小學生々徒ニ御親閱ヲ賜ニ付長陪觀ヲ可被
差許旨案内ヲ拜ス

昭和五年十二月十日全國私立大學長會議田中文部大臣ノ招集ニヨリ上京文部大臣官邸ニ於テ十一、
十二兩日開會十三日午前九時御召ニ依リ參内於鳳凰間、

陛下 拜謁ヲ賜フ別室南溜ノ間ニ於テ御茶菓ノ御饗應ノ御恩命ヲ拜ス

昭和六年十一月廿六日新宿御苑觀菊會ニ宮内大臣一木喜徳郎閣下ヨリ御招待ノ案内ヲ拜ス

天皇陛下 昭和七年十一月十六日大阪行幸二府五縣大中學校ノ生徒ニ在郷軍人等諸團休ノ御親閱ヲ
賜フニ付御陪觀ヲ可被差許旨案内ヲ拜ス

昭和八年四月廿日新宿御苑觀櫻會ニ宮内大臣湯淺倉平閣下ヨリ御招待ノ案内ヲ拜ス

種田虎雄氏

正四位勳三等
大阪電氣軌道株式會社
專務取締役

人は單に名望のみによつて勢力を支配し得べきではない、必ず實力の名望を支持するに足るものがなければならぬ而して名望は圓滿なる爲めに生じ、實力は鋭利なるが爲めに發揮せられるを以て原則として居るが故に實力は往々敵を招き自然名望を損することがある。

若しも實力をして名望を損せざる程度に於いて活動をしたならば、其勢力は測るべからざるものあらんと、併し此の兩者調和せしむることは却々容易の業でない。されば今我が國電鐵界に於いて實力、名望共に圓滿なる調和を以て自他共に許してゐるのが我が種田虎雄氏である。

氏は曾て鐵道省内にて手腕とその才能俊秀と、人格の清明高朗の點に於いて稀れに見る鐵道局長として信望を蒐め我が交通運輸界の花形と謳はれてゐた。

種田虎雄氏は岐阜縣土族種田邁氏の三男にして明治十七年四月に生る、同四十二年東京帝國大學法科大學政治學科を卒業し、同年文官高等試験に合格したり。爾來鐵道院副參事、鐵道書記官兼鐵道省參事官、兼遞信書記官、運輸局旅客課長、門司鐵道局長、運輸局長等に歴任し昭和貳年に退官したのである。その間鐵道事業研究の爲めに米國に留學され又歐米各國に出張を命ぜられたり。

氏は大阪電氣鐵道株式會社事務取締役に就任以來一般株主は勿論、多くの社員、従業員の信望は極めて深厚なるものがあるを見る。

これも氏の人格識見の一端を物語るものでなくてはならぬ、その民衆的態度、その温容な風貌なんとなく人を魅

する、即ち徳を以て廉潔な性情を自然に發揮するやうに思はれる、敢へて多辯を弄せず、一言一句悉く皆會社本位、實に花も實もある専務さんと彼等は神の如く敬し、慈母の如く慕ふて居る。

氏は對内的には徳望を以て社内を統御の任を全ふし、對外的には清明高朗なる人格と識見と力量を以て人を克服せしむ。兎に角溫情主義にして敵も味方も求めない、只幸にして自己の徳望と誠意が對者に迎台するならばそれで可なりといふ、内剛外柔淡快俠氣な性格は現代實業家中稀れに見る床しい點である。

蓋しその生立ち、その閱歷、その人格、手腕、力量、而かも豊かな人間味を多分に持つ種田氏の如き専務取締役を有する事は多事多望な東洋の電鐵王、大軌の爲めに洵に欣ばしいことである。

由來大軌電鐵は東洋一とも謳はれ、表面は實に波靜かで平和のやうに見受けられるが一度深く廣く大軌電鐵の裏面を覗けば千波萬波幾多の事柄が潜在し、所謂會社を代表すべき社内重段に於いて、内外大株主の不平が漲り機會ある毎にその先鋒が現はれてゐたが、種田氏が専務取締役に就任後こうした方面に銳意圓滿解決に總ゆる方法に於いて、不平一掃に努め、誠心誠意、一意専心大軌電鐵建設の爲めに日夜寢食を忘れて身命を賭して奮闘された結果各方面に於いても種田氏の熱誠、會社の爲め盡くす懸命の努力は遂に大株主を初め一般株主及び沿線住民の認識するところとなり、いまや全く不平不満は影を沒し、大軌電鐵に漂うてゐた妖雲は何れかへ去りて社の内外は常に一致協力、和氣霽然として、薰風颯々としてゐる、之れ全く氏の熱誠と人格の賜ものである。

斯くして財界に一暗影を投げて浮鎮の斷崖絶壁を歩んでゐた大軌電鐵は、一躍今や四千五百萬圓の大資本會社に造

り挙げ、業績益々良好にて、社運たるや旭日昇天の勢である。

尙氏は大軌電鐵の外に信貴山電鐵株式会社々長、中勢鐵道株式會社取締役等の重職にあり、資性温良なる貴公子然として氣品高く、神心凝然玉の如し、能く人才を愛し、人言を喜び、大局を見て斷を取る副主將の器である。

種田氏は大軌及び參宮急行兩電鐵の専務取締役を兼任し縦横無盡の快手腕を揮ひ、大軌は完全に完成したるも新設の參宮急行は開業日も淺きことゝて其業績は他社の如く萬點とは云はれないが氏の大會社經營の手腕と參宮急行が持つ唯一無二の誇りである日本の神都、伊勢神宮に終點とすることに依つて其事業の將來性のあることは何人とも雖も否定出来ない事業である。

實に參宮急行の寶庫は神都伊勢にあり、更に又參宮急行の沿線到る處には紅葉の大豪華版、香落溪を初め、關西の名瀑の名所伊賀四十八瀑を初めとして各地到る所には名所散在し電鐵會社の生命である遊覽、探勝、信仰の各必要條件を完全に兼ね備へられてゐるから同社の將來は、實に有望であることは何人をも認むるところである。

齊藤眞澄氏

醫學博士

堺市吾妻橋通

人に人格の重んずべきは今更言ふまでもないが、就中醫を以て業とするものは最も爰に意を教さなければならぬ。一概に云ふ譯には譯には行かぬが人の病氣の多くは精神状態に係るものである。されば病人そのものは醫師の提供する薬液が果して自己の病氣を治癒する上に於いて適當なるや否やを自覺するもの尠なし、何れも醫師の人格に信頼して、天地も代へ難き生命を託するものである。

諺にも『病は氣から』と言ふことがあつて、彼の醫師の診察を受ければ必らず治癒するものであると確信すれば薬の効き目よりは寧ろその精神作用が治病上大いに効果があるものである。又彼の醫師の診断を受けて治れば頂上、縦し不幸にして此の世を去つても本望であると云ふことは往々聞くことである。

恚る信頼を受くべき大責任のある醫師が利慾の爲めに匙加減するといふに至つては罪惡も是より甚だしいことはない。然るに近來醫道の頹廢甚だしく徒らに門戸を張つて俗世間を眩惑し、金錢の爲めに大切なる病人を愚弄し、胃病には塩水を注射したり、眼薬に蒸溜水を注して金を取ると云ふ惡徳醫師は大阪に往々あるやうである。けれども當該病人は素である。宜しく此の邊の事は醫師その人の人格に信頼する外はない。而かも大阪には人格の士が尠くないといふに至つては實に慨嘆に堪えない次第である。

然るに偶々神秘的の醫術を以て天職を全うし患者から神の如く尊敬をうけつゝあるものは堺市吾妻橋通りに偉風堂堂たる小兒科専門醫學博士齊藤眞澄氏である。

松井輝三氏

株式仲買業
大阪北濱

凡そ人として家運の長久を圖り、子孫の繁を思はざるもの稀である。而かも世人の多くは單に財産を作ることのみ
に汲々として最も肝要なる相續者の養成を閉却しつゝあるものは少ない、事理顛倒思はざるも甚だしいと謂はねばな
らぬ。

されば天下の北濱に株式仲買人多しと雖も能く父祖の事業と父祖の意志を辱しめざるもの果して幾人がある？蓋し
我が松井輝三氏の如きは好相續者として吹稱するに足るものである。

我が松井輝三氏が現在北濱に於いて若手と頭のよい事と營業方針の堅實とを以て其の名が普く天下に鳴り響いて居
る。元來取引所仲買人と云へば直に投機師とか相場師とかを聯想せしめ其人物を認めないが世間の通弊であつた、乍
併今日の株式取引所仲買人は我が經濟界と密接の關係を有するものなれば此取式所仲買人は最も進歩せし文明的の職
業であらねばならぬ。従つて仲買人には相當の新智識と新學問と人格と手腕は勿論、資産と信用の伴ふものがなけれ
ば到底其職業を盡し又、社會から尊敬をうけない。

我が松井輝三氏の如きは全く以上の條件を完璧した所謂現代社會が要求する新時代の株式取引所仲買人の典型であ
る。

氏は故松井伊助氏の息にして温厚謹直、其誠實の態度と人に接して壯重なる應接とは世の所謂相場師なるものと大
いに其選を異にし確に其人格を認め得らると同時に近代的仲買人として其素質を具へたるもの云ふことが出来る。

今日の株式仲買人の多くは相場師根性を以て權謀術數己れの利益を收むることに汲々たるに反し氏は其人格と共に

正義實着を旨として専ら信用を重んじ所謂顧客本位を以て其職責を盡しつゝある人にして要するに松井商店に錦上更
に華を添へ今日の大發展は一に此の至誠を以て盡瘁したる結果である。

殊に近時仲買人の品性問題が屢々世評に上り人物改善の問題なるものが學者、爲政家、實際家に依て唱へられるや
氏は竊に仲買人の品性を向上して顧客本位を絶叫し改善問題に盡力しつゝあると共に其業務の經營は最も秩序を重ん
じ信用を専らとして居る。

松井商店の社會的信用

現今北濱に於ける株式仲買人中で松井商店の名は『カタイ屋』として信用を擅にし更に其客筋も亦『カタイ屋』を
以て社會に知られてゐる。

當主輝三氏は誠實一遍の商賣勉強一點張りの人であるからお客に對して一厘一毛の迷惑を蒙らしめた事もなければ
不正の手形と奸策を弄して不正の金を攫んだ事もない。其上氏の『カタイ屋』は註文玉の保證金代用としてお客入よ
り預つた有價證券には縦へ店の都合で如何に金の入用があつても決して手にかけてぬといふ、心の錠則をキメ付けた。

そんな確實な遣り方だから客人は『松井商店なれば安神なものだ』と信用するやうになり、商賣は益々繁昌する、
繁昌するに連れて店が旺んになる、盛んになるに連れて信用は倍々加はりてくる、信用が倍加するに連れ、氏の身代
は太くなる、身代が太くなるに連れて客筋が自づとよくなつて來たといふものである。

客人の側から見ると仲買店の『カタイ屋』を選ぶのは當然である。先づ幾何かの建玉を注文するにしても一々保證金を其店に托せねばならぬ、それも一週間か二週間位の事なれば兎も角も賣買孰れの方針に由るも其見込の都合にて如何に久しきに渉るかも知れぬ、其上に尙思惑が建つとしたならば更に追玉と稱して尙多くの保證金を托せねばならぬのである。

時に亦客筋のよくて、大玉を注文する位のものになると少くとも三四ヶ月、或は半年位の見込を付けて注文玉を發するのである。而して是等になると日々何かツツの玉を賣買せしむるので、其日數と建玉の自然と多數に上るのは當然である。

而して之等保證金は巨額に達する、而も之を悉く托するのであるから、餘程信用した店でないに容易くは注文を發せないのである。

松井商店などは北濱中でも最も信用するに足るべき大店として、更に店主輝三氏は最も信用するに足るべき人として社會一般から目せられてゐると同時に畢竟今日あるを致したのである。

且夕を斗られない、浮いた商賣で決して人様の物を預りてゐるのだから、一日も片時とも雖も忽には出來ないとは氏の信條である。

渡邊綱五郎氏

和歌山市長老

和歌浦町

他人の爲に己を空うして活躍する、夫れは古今東西を問はず美はしき事であり、人の望を受け人の讃辭を一身に受くる名譽に輝き隠徳を積む最良の方法である。

然し言ふは易く行ひは難く他人の爲に社會公共の爲めに自分のあらゆる努力を捧げて社會公益の爲めに國家の利益の爲め奔走する事は容易に出来得べきでない。

世の人々は往々にして或は特志家を利用し或は之れを嘲笑して決して其厚意を善意に解釋せぬまでに人情輕薄となり、決して他人の行爲に共鳴し共力して目的の達成に努力する様のを待つは至難な事である。

然し又たとに共鳴する者あり、救助するのありとするも自己を不利な立場に置いて社會の爲めに貢献する事はなかなか出来得べき事ではないのである。

我が渡邊綱五郎氏は和歌山縣ト事業界の先輩として有名なるものである。氏が明治五年十月十二日舊和歌山藩故渡邊邦藏氏の長男に生れ、年少より産業立國の大志を抱き而かも和歌山市が綿ネルの主産地なるを以て先見の明と郷土愛に血を燃す氏が綿ネルの特産地に完全なる染工場を有せないことは斯業發展上一大欠點にて業界は勿論、地方の不利はより甚だしきことなしと自ら第一線に起ち同志に語り、先づ和歌山綿布株式會社を創立し染工場を起し苦心研究の結果完全無缺な染色加工を發見し以て今日同市の染色加工の異常なる發展の基礎を築き上げたる大なる功勞者である。他面亦市政界に乗出し市政向上發展の爲め選ばれて大正六年和歌山市會議員に當選次いで市參事會員となり市の爲め貢献し、而かも一方の驍將として空飛ぶ鳥も落したり。

氏が公人として經歷は概略以上の如くである、要するに渡邊氏は奮闘的の人物にして常に自己一家の爲めのみならず常に公共の爲めに奮闘し民衆の爲めに活動し、或は市政の爲めに奮闘し、又は國家の爲めに産業立國の爲に絶へず盡瘁せられたる和歌山市の大恩人である。

現在は第一線から勇退し明光風媚の和歌浦に好きな刀劍を愛し風月を伴として悠々閑日月をおくつて居るがそれでも種々な問題を持込んで来る。

元來氏が非常に人間味豊かな人で亦世話好きでよく難儀なものを助ける、誠に仁侠に富んだ男らしい人である。今日同市は勿論其他遠近の政界、經濟界の紛擾には大抵顔を出して始末をつけ居る、渡邊氏が來たと云へば一切の理窟を抜きにして丸く納まる。別に大した教育があると云ふ譯でもなし、實業界の長老、市政界の元老と云ふだけで去りとて世の所謂俠客の様に多くの乾分を有つて拳骨を飛ばして對手を脅すのでなく、社會の爲め、人の爲めなら身を粉にしても厭はぬと云ふ熱心と正義のため公利公益の爲めには火の中、水の中も辭せないと云ふ。此の誠意を唯一の武器として何事も支配して居る。

だから渡邊氏の仕事には無理がない、チットモ片手落がないから何人といへども従ふのである。蓋し眞に世の中に俠客と云ふものがあるとすれば渡邊氏の如き人物を指すのであらう。

自大思想、自己尊大、時代の趨勢も知らねば他人の進歩も知らず、世の中は何時も自分計りが勝者であるやうに思ひ、富の單位も變れば人物の相場もかはり、世は既に遺忘せんとしつゝある同市に依然として富の所有者、名望の抱

擁者と自認し泰然自若たる人の多い和歌山紳士間に唯一人群鶴の一鶴、退嬰、落伍者、亡び行く思想家を卑視し、隱然勢力を有し同市の天下を支配する底の一大氣魄を有する快漢、渡邊綱五郎氏の存在は確かに奇蹟的存在である。或意味に於いて同市の誇りであつて亦一服の清涼劑である。否カンブルの注射乃至食塩注射である。

天下の名市長として令名藉甚たる和歌山市長渡邊行太郎氏、亦縣下實業界に人格崇高として斷然業界に光る和歌山綿布株式會社々長福島嘉六郎氏等が氏の令弟である。

濱 恒次郎氏

大阪木材市場株式會社々長
株式會社濱恒商店社長

自己主義を以て世に處せんとする時代は既に過去のことである、今日の實業家は須らく世界的なると同時に、自己主義を改めなければならぬ、然るに余輩が今日まで見聞したる所に依れば關西材木界の人々は余りに自己主義ならざるなきか。さらば自己の利益を計らん爲めには殆ど何物をも顧みざるの暇なきが如く、眼中國家なく、社會なく、隨つて他人の榮達を見れば甚だしく之れを妬むと共に自利の爲めには他人の迷惑をも構はず、國家公益をも、尙犠牲にして顧みず、總て利害問題にあらざれば人と談合の出来ないと言ふ傾きがある。

併し一個の素町人として社會の階級より遠ざけられたる野蠻時代ならいざ知らず、今日の文明的實業家として社會に最も勢力ある紳士として待遇せられ、且つ重用さるべからざるに拘らず、自ら素町人根性に甘じ、舊思想を脱し能はざるは余輩が大阪人の爲めに痛嘆に堪えざるところである。此の時に當りて大阪材木界の人格者を物色すれば、先づ我が濱恒次郎氏に屈しなければならぬ。

濱恒次郎氏は材木王として業界に羽振りを利かすやうになつた。抑々大阪市の千島町を全國一の木材置場とならしめた端を拓いたもの、實に氏の偉大なる努力に依るものである。由來千島町はこゝ十年前までは話にもならぬ邊鄙な土地であり、現在面積の約五分の一位にしか當らなかつた。その千島町、小林兩町の殆ど總てが材木置場として占められ、今やその面積は實に廣袤五十三萬餘坪にも及び、大小五百數十軒の材木商が一律に並び、山と積まれた木材の額面は一千萬圓を超えるの有様である。斯の如く千島町市場が他の市場を遙かに凌駕して、全國一の木材市場に發展たらしむるに至りしは株式會社濱恒商店社長、濱恒次郎氏の努力に負ふところが多大である。濱氏は浪速區木津川町

一丁目材木問屋を經營せし頃、早くもこの千島町方面に着眼し、大正七年の好況時代に自己所有の製材所と木材置場の敷地を某所に賣却し、尠からず富を得たので犠牲的にその利益の一部を裂いて同方面に貯木場を設置せん事を企圖した。所がそれ以來濱氏の計畫に賛成する者續々と殖へて、急進的に僅かの間に於いて木材市場が此の地に移されるに至つたのである。由來大阪は關西切つての材木の集散地として知られ、河川を利用して木材の置場となし、場所の狹隘と水上交通の妨害となり各々同業者に於いて惱みの種であつたのが、この千島、小林兩町に大正九年完成された貯木場の爲めに漸く難問題から救はれたのである。現今に於いては木材會館は建設せられ、公共的催しの會合、商談講演等々日夜利用せられ、同方面一帯は眞に統制ある發展を遂げられ、活氣横溢してゐる。

この千島町を材木屋町たらしめた生みの男、株式會社濱恒商店社長、濱恒次郎氏は關西に於ける材木王として、業界切つての權威であり、代表的である。その基礎の強固と經營振りも總てが合理的である點と、社長も従業員も差別のないと言ふ温情の溢るゝばかりの木材會社は關西廣しと雖へども濱恒商店唯一あるのみと云つても敢へて過言でもあるまい。地方の信用は勿論であるが大阪市内に於いても信用は殊の外厚く、濱恒商店なれば大丈夫と確い商店で押しも押されぬ一流大商店である。然して濱恒次郎氏は和歌山縣東牟婁郡田原村大字下田原の出身である。明治十九年の中秋、大阪へ奉公に出で一人前の大材木王たらんと確い決心の元に郷園を離れて來阪した、そして西區長堀南通三丁目にある材木問屋中川半平商店に一小僧として入りたり、その年十四才の時であつた。それ以來は専心専意一牛懸命に致々として忠實に勤みれば、主人も非常に將來を期待してゐた。氏は二十二才の折、同店の支店が開設

されるにあたりその主任を命ぜられた。明治卅三年の五月、氏が二十五才の時は最早く一本立の商人としての貫録を充分に與へてゐたりしも主家大事に仕へる裡、或機會を掴み中川氏の諒解を得て前記木津川一丁目に自ら材木商を營んだのである。氏は材木界に身を投じて以來、自ら先頭に立つて行詰れる木材業者の爲めに打開、改善の策を圖る等筆舌も及ばぬ目ざましい奮闘努力を續けられ、同業者のために大いに氣を吐き傾注されたのである。

氏は明治四十一年十一月、大阪材木商組合の創立に於いて評議員に當選し、更に大正七年同組合役員改選の結果組合長に當選、同年十二月大阪材木市場株式會社が創立に際して取締役社長に推選され、以來同業組合の副組長に再選三度、組長代理たること一度、木材市場株式會社の社長に就任二回、大阪商工會議所議員、借地借家調停委員、商事調停委員等數回推選されてゐる。

濱恒次郎氏は資性温厚篤實にして、風采態度の應揚なる、然かも自然に具はる品性、品格を有し、一度氏の温容に接せんか、駭蕩として春風に吹かるゝ想ひがある。亦氏は決して野心がない、氏にして野心があり、名譽に汲々たるものあれば、どんな事でもなし遂げられないことはない、けれども氏にはそれが毫もない。飽くまで隠れたる徳望家として終始してゐる。輕薄なる當世に多く見るべからざるの實に奥床しい好紳士である。

谷口豊三郎氏

東洋紡績株式會社
取締役

實業界は嚴格なる意味に於いて常識の戰場である、實業家に常識を要するのは猶軍隊に各種各様の武器を要すると同一である。

單に今日と云はぬ、就れの時代、如何なる時代にも斯くの如き常識の人は必要である、就中今日の如き過渡期の實業界には切にその必要を感じるのである。

所謂過渡期の犠牲たるべき實業界の偉人物は吾人に向つて常識の發達を教へ、鍛練を教へ、應用を教へ、更に効果をも教へつゝある。實業家に取つての常識は或る意味に於いてパンよりも冷泉乃至衣服資本よりも必需品の一つとなつてゐる、常識は大資本である、大才能である、大建築物である、更に大信用である、彼の前には資本、建築物、果して何の爲めになるものぞ。

我が谷口豊三郎氏は曾つて關西財界の大立物故谷口房藏氏の御曹子にて華城財界に於いて最も常識の發達したる新進の實業家として東洋紡績株式會社取締役、以前豊田織機株式會社、和泉紡績株式會社、吉見紡績株式會社其他數社の社長及取締役として大いに羽振りを利用してゐる。氏が非常に學問したと言ふ人でもない、だがその才能、見地、手腕、人格を見るに大學者などは氏の足許にも寄れない。

而して氏には慥かに一つの天品がある、即ち發達せる常識である、氏の熱誠、氏の奮闘、氏の精力、氏の人間味は此の常識の發揚から轉化したものである。氏が各關係會社の爲めに銳意これを勉めつゝある其の經爲が現實は移つて、氏の常識を遺憾なく發揚してゐる事が知られる。更に亦發達せる常識を有する氏の口より出づる言は、多くの人

を活かし、亦救はふの力がある、宛かも天來の福音のやうに。而し氏必ずしも人を救ふに足るほどの雄辯ではない、然れどもソコが發達せる常識の力は亦格別である、故にその言には無埋がなく、片手打がなく、極めて公平に、極めて誠實を批瀝した處が見える、隨つてその云ふ所眞理を含まれてゐるのである、常識の人は何事も自己の常識から割出した議論よりせない、デあるから其議論は眞である、正である、牽強附會な處が毫もない、況んや鳥を鷲と胡魔化すをや。

谷口氏の至公平な議論と眞理ある言語には敵はない、宛かも仁者の敵のなれど同一である、而して氏が關係を有する諸會社幾千の社員及従業員や株主達は皆氏の言語を神の福音と聞いてゐる、否會社内だけでなく、關西財界に重を爲せる所以は氏の生命であり、活力あり、眞理ある言語に因るものである。

而かも氏の型は純眞そのもので純英國式の紳士である。風采そのものを見ると寸分の隙がない程にすべてが整つてゐる、この風采がそのまゝ谷口豊三郎氏の性格と言つてもよいのである、抱擁力も多分に持ち人に對しても親護りそのまゝの溫容で多くの人々は神の如くに敬し慈母の如く慕つて居る。

明日の華城財界を背負つて起つ明朗な紳士である。現在華城財界五人組のあしべ會に最近入會し氏の一流の明快な頭腦を以つてグン／＼と勢力を張出してゐる、氏があしべ會に入會してから同會が何んだか急に明るくなつたやうな清新な氣が社のあしべ會の内外に充滿して居る。

故人も此の好後繼者を得て嘸満足であらう。吾人も亦谷口家萬代の爲め慶賀に堪へない次第である。

故 谷口房藏氏

氏は文久元年一月を以て大阪府泉南郡田尻村に生れたのである、幼にして聰明なる故人は父母の力を借るを潔とせず子供心にも所詮草深い田舎に汲々としては到底將來に望なし、何うかして都會に出で天晴天下の實業家たらんとし十九歳の時竹馬の友、樽井村の戎野喜太郎氏と共に相携へ熊野路を経て三重縣下の事業界を視察し大に感ずるところありて兩親の意に逆ひ年少再び兩氏相携へ奮然郷關を辭し帝都に上る、古今盛衰興の蹟を釋ね、凡そ事の成るや其因で來る所多々にありと雖も要は人生本來の通弊たる依頼心を斥け獨立獨行誠實を以つて奮闘するに在りと爲し自分の責任たる各取引先の金銭出入を極めて明細に書殘し且つ自己の所有物品まで小包にて大阪より送り實に文字通りの空拳家を飛出し途次滋賀の天津にて兩氏囊中僅かに金二圓餘を存すのみであつたと故人が余に屢々語られた、從々兩氏は苦勞艱難の結果、戎野氏が關東實業界の重鎮となり谷口氏が亦世人周知の如く關西實業界の巨星として兩雄東西相呼應して天下を支配したるは全く筆舌に盡し能はざる痛快事である。

有 田 邦 敬 氏

正 七 位 勳 六 等

京阪電氣鐵道株式會社副社長

關西電鐵業界に人格崇高と技術の優秀を以て斷然光る有田邦敬氏とは如何なる人物なりやと余が屢々質問をうける余は即座に答へて曰く『有田氏は至誠實行者なり』と應ふるのである。而り確かに氏は至誠の人である。

濃厚篤實、紳士の典型である、不言實行の人である。語るよりも手を用ひよとは氏が躬を支配して居る。之れが氏の主義であり、理想である、父母である。よく言ふ者未だ必ずしも克く行はずとは氏が對人的夢談の一となりてゐる故に亦氏は名を求めるよりも、實を貴ぶ健實なる人である、多くの場合に於いても決して賣名を欲せず、實を尙ぶ風がある。氏は亦全然表裏がない、暗黒がない、極めて光明の大道を辿る人である。

氏は常に語つて曰く『至誠なれ』……至誠は最後の勝利者である計りでなく、其行にも至誠を主としてゐる。氏は兵庫縣の名望家有田徳松氏の長男にして、明治十六年九月を以て生る。同四十一年京都帝國大學法科大學を卒業し、直ちに文官高等試験に合格し、逓信局副事務官に任じ、西部逓信局總務部監督課長に任命せられたり。

後に官を退きて民間に下り大正四年大阪市助役となりた、大正九年市命を帯びて歐米各國を巡遊視察したり。歸朝後間もなく京阪電氣鐵道株式會社の副社長に就任せられ、同社の爲めに銳意努力しその業績に至るや益々日進月歩の勢を示してゐる。氏が京阪電鐵副社長として終始一貫、至誠の實行者として、氏の人格がハッキリと高めつゝあつた凡そ人物に尙ぶ所のものはその人格である、人格は人物の生命ではないか、而して其人格は其人物に附隨して如何なる所にも見られるものである。

假令へばその仕事に見られ、態度應對に見られるのである。若し之れを仮に銜ふ者ありとするも、そは一時のこと

で、幾何もなく如此の人は馬脚を露出するのである。偽善的人格の粉飾は宛かも、メッキのソレの如く幾日ならずして地金を露はすものである。人格は猶純金の如く常に錆、且つ變色の憂なきのみならず、其風趣自づから歛すべきものである。

人格は猶金剛石の如く、氏は暗中に在りて、尙燦然たる輝きを放つ、氏は決して銜はず、誇らざるも、却つてその天真の流雨路なる處に靄然として掬すべきものと共に人をして轉た、敬慕の念を禁ぜざらしむるものがある。

偉人が去つて偉大を知られるとは先哲の金言である、然り。有田副社長の今日あるは京阪電鐵に取りて、確かに心強きことを感ぜしめてゐる。

氏は正七位勳六等の榮位を有し、家に巨萬の富を有すると雖も、毫も威張散らすやうなことなく、清颯たる風采と玲瓏玉の如き品性を以て人に接し、萬人を魁けしてゐる。

將來性ある京阪

京阪が持つ唯一無二の誇りである東洋一の商工都市たる大大阪と、一千有餘年の帝都たりし風光明媚繪の如き京都を共に始終點することに依つて愈々益々將來性のあることは何人とも否定の出來ない事實である。

實に京阪の寶庫は大阪、京都は勿論、更に東洋の水郷琵琶湖にあり、而も京都は世界に燦然と輝く佛都にて四季を通じて參詣、遊覽、探勝の容は絶えず、亦沿線には伏見桃山御陵、青葉をグット押しわけて清澄な水が涼々として流れ

る宇治の名郷、其他到る所に名勝舊蹟が散在してゐる。

清淨な空氣と太陽の紫外線から遮斷され騒音とジャズと煤煙の下でビジネスと仕事の重壓の下に働いて神経を疲れさせる都會の人達にとつては繪の京阪沿線、詩の京阪沿線、神話の京阪沿線、傳説の京阪沿線こそ正に家族連れ一日の清遊地として絶好の場所である。

京阪は實に將來性を多分に有すると共に有望多事多端である。吾人は前途實に有望なる京阪に而かも會社の心臓部である副社長に氏の如き横溢せる覇氣・才氣に富む、副社長を得たることを京阪の爲め衷心欣び、しかして氏が我が電鐵界の異彩たらしむことを確信すると共に其期の速かならん事を切に期待するものである。



松下幸之助氏

松下電氣製作所主
京阪沿線門眞

少しく産を成す者あれば世俗直に之を成功者と謂ひ、其手段の如何なりしかは措て問はず是吾人の容易に首肯し能はざるところである。誠に一步を進めて觀察せよ、所謂成功者なるものうち如何に多くの不正人物、如何に多くの僥倖兒の存在せるや。明治維新の變革に乗じて不當の奇利を占めたる如き、投機場裡に一躍萬金の巨利を獲たるが如き國難に際して所謂火事場泥捧的の私利を圖りたるが如き、枚擧の煩に不堪、彼等に光明あり、機會を逸せざる敏捷ありと雖も其手段たるや以て後進の範とする能はず、況んや彼等の眼中國家なく人道なきに於いておや、是等短見者流の以て成功者となす。

滔々たる實業家中、眞摯なる人格と堂々たる手段を以て獨立奮闘よく自己の運命を開拓し遂に巨萬の富を積み、其往く處常に國家公共の福祉に終始せざるなく、燦然として木邦電器製作界に輝く我が松下電器製作所主松下幸之助氏の如きを有する事は頗る人意の強ふべきにして青年諸君の好模範として活きたる教科書として欣ばずんば非ざるなり。

光茫萬里を照らす 松下電器製作所

ナショナル受信機、ナショナルランプ、其他電氣器具製作を以て天下に鳴る松下電器製作所が本邦電器製作界の霸王たるは今更喞々を要せず、其鬱乎たる事業圏は實に業界の白眉にして其經營振りの周到綿密を極め従業員の優遇に關する遺憾なき設備と寛容鄭重なる社員優待方法とは今や漸く首尾脈絡完璧し、宛然一大掌踵の如く起倒盛衰定まり

なき事業界に於いて駸々乎々一絲亂れず、進展の歩武を示しつゝある。業績に到りては眞に稀觀の偉觀にして徒々に巨資本を擁し膨大なる規模を有し、而かも經營に困憊し左支右吾して僅かに事業の命脈を保持するに汲々たるものに比し全く其選を異にし、我國の電器を語るものをして夙に代表的製作所たる稱讃崇敬とを拂はしむるもの又宜なりと謂ふ可し、而し同所の今日あるは實に所主松下幸之助氏が一意一業主義を奉じ商業道德を唯一の武器とし電氣文明の爲め全力を其經營に傾け苦心計劃向上發展の理想に邁進し、他面社員及従業員諸氏亦協心戮力社業の興廢を以て一身の榮辱とし、努力を傾注し、延いては勞働者諸氏の發奮を喚び起したる結果に外ならぬ。

而かも同所の方針たるや隨時松下所主が發表せる意見抱負に依りて窺知せらるが如く切に斯界の北斗たるを期するに在りて、其今日の成果は松下所主以下使用人の末に到る幾百人が創立以來十年間粒々辛苦の結晶たる亦能く世の知る處たり。

然れば同所關係者諸氏の決心覺悟は所謂彼の綱利賣名の實業家と異り、眞に懸命を極め曾て宣明せるが如く同所事業を以て生命とし、専心一意此一事業に全力を傾注し粉骨碎身社業の發展經營設備の向上を念と一路此道程を辿れるのみ他を顧みず。従つて同社營業成績が又他社の容に企及し得可からざる諸多の優點を有し、駸々乎々として日に月に進展を重ね、着々社業擴張の餘裕を示し首尾一貫規模の充實に力め、製品の聲價愈々益々大空高く内地は勿論世界到る處の市場に足跡を印し隆々たる信望を蒐め得るもの全く卓越せる經營の結果たりと謂ふべく終始一貫巨然として正々堂々と其足跡は巨人の夫れの如くにして眞に王者の歩みと謂ふ可く、實に松下電器製作所が今や本邦業界の覇者

に非ずして王者を以て稱せらるもの誠に其所以たり。

松下電器製作所内容

ナショナル受信機、ナショナルランプの需用熱は今や枯野を焼く火のやうな勢いで全國津々浦々まで知れ亘つてゐる、其新時代の寵兒の製作王松下電器製作所は大阪市外京阪沿線門真に偉風堂々と君臨す二萬坪の第一工場及び本店を有し其他市の内外に十二工場、神奈川縣辻堂、並に東京、兵衛縣下に總數十五工場を有し、東京、名古屋、福岡の主要都市に支店を設け更に京城、金澤に出張所、臺灣、北海道に配給所を設置し全國各都市の代理店は實に十萬近くに及んでゐる。

第一事業部 は新興産業たるラヂオ關係の一切を支配し、東京中央放送局の優秀品選定に際し斷然第一位に推薦の光榮に浴し更に電動機製作を企劃し最近その第一回品を發表するに至りナショナルモーターの名をして天下に馳るて到る。

第二事業部 は大阪市東淀川區豊崎東通第八工場内にあり、ランプ乾電池及びバイタル錠、マーツ錠、エイスリムベル等の自轉車部分品の一切を管理し、新智識、現代科學を折込み、其品質の卓越群を抜き生産販賣額は斷然東洋第一位にあり、自轉車用、家庭用ナショナルランプ及び燈火用、通信用、ラヂオ用、ランプ用の百般に供給するナショナル乾電池は内地は勿論海外に輸出し最近遞信省指定工場になり、鐵道省、海軍省の下命を蒙つてゐる。

第三事業部 同部はコンバウンド製、マーツライト製、金屬製、陶器製の百六十餘種に上る各種製品何れも好評噴々たるものがあり、就中マーツライト製品或は完全なる電器絶縁性に於いて誇るべく其獨特の優美なる氣品と相俟つて各種造型具素材として前途洋々として春の海の如し。最近に到つて大阪國立工業試験所の發明に係る特許スーパーナショナルライトの製造權を委ねられ從來漆器製品に代るべく、各種食器類、化粧品容器等の製作に着手、其品の優雅と精巧と科學的に洗練されたる特質は經濟的利便と相俟つて萬雷の拍手を以て迎へられ各方面から注文殺到してゐる。

第四事業部 は電氣アイロン、電氣コンロ、反射ストップ、電氣コタツ、電氣座蒲團、電氣半田コテ等々數へ切れない家庭電氣日用品の製作を司つてゐる。

職員の幸福設備

職員職工諸氏の幸福を増進せんがためには店員養成所、店員寄宿舎、精神修養の爲めに大講堂を建設し又人間には吉凶禍福か常に付いて廻れることを思ひ、或は結婚の場合、子供の産れた場合、或は兩親や妻子の不幸の場合又は自分が病氣に罹つたり負傷したり場合に同僚同志が有無相通じると云ふ目的から相互扶助の制度等を設け社會事業が徹底してゐる、尙毎日曜及び大祭、祝日の定休日を除いて致々として働く職員従業員を慰安するがために春秋二期には花見、遠足、觀劇會を催す企劃もありて上下和樂の裡に意志の疏通を計りつゝあり。

純家族主義にして上下一致

工場の繁榮は緊つて従業員の骨を惜しむか否かにある、従業員は工場の至寶であるから我子よりも大切であるとは松下氏の意見で其待遇は至れり悉くせりであるから従業員も又主人を思ふ事一方ならない之れが毎日々々の工程に大影響を及ぼすは勿論である。

松下製作所の今日の隆盛を來たしたものは一に松下氏等の力にありとは言へ一従業員に至る迄萬死且つ辭せざる底の奮闘と亦大いに興つて力あるものである。

電氣器具製作に従事する従業員は特別の技倆を要するから俗にいふ『渡り者』となつて去る者も亦來る者も兩者ながら藥にしたくでもない、永年勤続の古參従業員の氣質よろしく隨つて一般の氣風善良にして當局官憲 於いても夙に模範工場と認め、工場側と従業員側とは舊くから温情主義を以つて結合せられ、和氣満場の工場として特別な空氣が漂うてゐる。

青年の龜鑑 松下幸之助氏

本邦電器製作王、松下幸之助氏は如何なる人物にして如何なる性格を備へ、如何なる經路を辿れる人かは苟しくも氏を知り而して氏を知らんと欲する所にして試みに之を縦横無盡に論ずるは極めて興味深き事なるを信じ即ち茲に

吾人の眼に映じたる氏を捕へ來りて諸君の前に縦横解剖のメスを下さん。

松下幸之助氏

氏は明治二十七年十一月和歌山縣海草郡和佐村に生れ同地の小學校を卒業、施乾轉坤の神童は一寒村の小天地にきよくせきとして一生を空しくすることを許さず膽躍の志は猛然として終に明治四十二年東洋の商工都市大阪に伸ばし以て一大飛雄を試むべく意を決して大阪電燈株式會社技術部に入り、十年間刻苦精勵實に文字通りの涙ぐましい奮闘を續け大正七年獨立して現在の松下電器製作所を創立し遂に今日の如く大をなしたる近代の立志傳の人である。

氏は大阪財界に於ける和歌山縣出身の代表的人物にして紀州が生みたる在阪紀州人中最も其特色を發揮したる一人なり。由來人物の高下は職業の貴賤に依るものにあらずして其性行の如何に依るのである、

而して最も能く時勢の要求に應じて其特色を發揮し國利福民、世道人心に裨益することを心掛くことを以て人生の意義に叶へるものである、今や世界は不斷の經濟戰に其雄を争ひつゝあり、激烈なる商戰の陣頭に立つて機智縱横、功を收め利を占むるは、千軍萬馬の間に百戰の勇士が赫々の武名を成すと同じく、其生涯は實に貴重なる文化の資源である。

松下氏は大阪に於いて未だ第一人者たる地位に至らざりしも氏は實業家として大阪財界の優秀者たるべき前途を有し多大の信望を集めてゐる。

殊に氏は紀州人として大阪財界に潮を稱せる多大の人材中に介立し大阪財界の名物たる電氣器具によりて其出世を

前提し更に幾多の會社に關係して其鋭才を揮ひ、之れとて可ならざるなき才分を豊饒を示せて眞に現在財界の一偉觀である。

而して氏は財界に在りて異數の成功者たりしのみならず又其散金の工夫に於いても所謂世の成功者流と其選を異にし氏は任俠にして慈善を好み公共の爲め金を損て善事に向つて邁進すること枚舉に遑あらず。この點に於いて他の成金輩と全然趣きを異にしてゐる。

吾人は素より氏が事業家として力量に敬服するものなるも而かもまた氏の人格を欽慕して已まざるものなり。



楠部敬一郎氏

楠部眼科病院長
岸和田市野田町

醫學の先進を以て誇る獨逸に劣らぬほど異常の進歩であらうと云ふ我國の醫療機關の現状を見るに、尙多くの遺憾と戦慄を覚えるものである。大阪は勿論、どんな田舎を歩いても各科醫者の堂々たる看板が揚げられ、相當の療病者を抱へてゐるのを目前にする時、唯表面の觀察では甚だ意を強ふ者があるやう、だが一度ソウツト彼等の裏面を窺ふ時は身の毛が慄ふとするやうな醜快な問題が潜んでゐる、暴利、不親切、誤診、偽者、脈を取るよりも金を取る金を取るより機嫌を取る等の罵罵呪咀の聲が漲つてゐる。然し之とても醫術未開の時代ならば兎に角として今日は療病手腕に於いて一等國を以つて誇る我國の現状が此の儘では何んとしても人道上看過出来ぬものがある。

更に療病機構の最悪を窺ふ時一度醫治上無智に等しき大衆が當の醫師より怠慢、誤診を以て當らる時にありて、假令不知なるが故に反撥なしと雖もその實、害たるや天日共に許さぬ大罪惡の公行と見ねばならぬ譯だ。

茲に岸和田市野田町に開業せられる眼科楠部敬一郎氏は常に醫業の大衆化、醫道を昔の仁術常軌に引戻さなくてはならぬと高唱されてゐる。氏が患者に接する態度たるや極めて親切、丁寧、懇切、到り盡せる診察振りに一度氏の手に接したるもの感嘆の聲を發せざる者なき有様である。氏は全く名利を度外視し、眞に情性的に治療してゐる。

故にいま多くの患者より吾等の救命主よと慈母の如くに慕はれ且尊敬を拂はれてゐる。而して氏が天性温厚、實相玲瓏玉の如き人格の所有者である。

二枝婦人 は元和歌山縣會議員、現熊野自動車株式會社、紀州砥石石材株式會社重役永野經一氏の令嬢にて淑徳高き賢婦人として泉州婦人界に重きをなしてゐる。

麻殖生徳次郎氏

大阪製粉株式會社取締役
加賀清商店・澱粉製造販賣業

奮闘主義は現今時代風潮の一つとして、到るところに歓迎せられつゝある所のものであるが、殊に競争角逐の尤も酷烈なる澱粉製造業界では、一日たりとも、半時たりともこれなくてはならぬ必糧の食料品として、苟しくも偉大な成功を夢み、高遠なる志望を描くもの、總てが多量に抱懐しつゝある思想、理想と云ふ事が出来るのであるが、言ふが易く、行ひは難い世の習ひ、折角高遠にして偉大なる精神を持って居つても、偕て實行するものは非常に尠ない理想的に奮闘したるものは稀有で恰も天空に輝く星の多き内に、最も光輝を放つ一等星は僅かに其幾萬分の一なるかのやうである。

この尠かるべき理想的の活動兒として我が麻殖生徳次郎氏を挙げたいのである。

氏は和歌山縣加太町の名家麻殖生勢助氏の二男にして明治十一年十二月に生まる。同十八年令兄竹之助氏の跡を襲ひ家督を相続せり、同二十九年製粉業を開始し、爾來刻苦勉勵、業績日に揚り、其堅實なる營業振は業界の範王として稱讃の的となり、以て天下に鳴る家柄である。

然して自店の發展のみならず精勵の傍ら廣く製造業者の爲めに、又國家の爲めに盡力したる功績多大にして、彼の遠く大正七年歐洲大戰當時に於いては、澱粉の海外輸出に、輸入防止に専ら力を傾倒する外に組合の創立に極力努力を措まなかつた。斯の報は達せられ遂に強固なる組合の設置を見るに至らしめる等、幾多の難問題を圓滿解決に導く功勞頗る多く、氏の機能を充分に發揮せらるるを悉知するところにして、實に氏の奮闘たるや感歎措く能はずである。昨昭和九年二月十一日紀元祝祭日に實業功勞者として表彰せられたり。

尙氏は加賀清商店の外に大阪製粉株式會社取締役であり、最近大阪粉商工同業組合長に推選せられしも之を都合にて辭したのである。

氏はまた非常に負けず嫌ひで、苟しくも他人から指揮されるやうな事は斷じてせない。而も氏の特長は一度約束したる事は如何なる場合に依つても破らない、同業者や得意先に對しては斷じて迷惑懸けないと云ふ、いとも頼母敷心掛を營業方針に織込んで行くので、自然得意先たるもの有頂天となり「澱粉は加賀清に限る」と今や此の聲は大大阪商都を枯野の火の如き勢を以て馳せてゐる。

此の店にして、此の安心ありと言ふ具合に大阪製粉株式會社、加賀清商店の信認極めて重厚なるものがある。また氏は大楠公主義の崇拜の念高く、近時吾人の目に新たなることは昭和十年五月四日、錦城師團の中にも勇武の譽れ高き、菊水聯隊の名を負ふ第三十七聯隊營庭に於いて大楠公の銅像の除幕式が厳かに舉行された、その大楠公の銅像建設寄附されし厚篤の士こそ、誰あろう大大阪に於ける製粉界の最高權威、麻殖生徳次郎氏である。

氏は本年一月中旬同聯隊を訪れて、當時聯隊長たりし三浦敬事大佐と會談久しきに亘り、菊水聯隊の話にうつりたり、然して同聯隊は大楠公發祥、奮戦地たる攝河泉を徵募區域としてをり、名も菊水聯隊と稱して、同聯隊の天幕及び什器等、陸軍用品で星章を附けるやうな場所には必ず菊水紋章を描き、尙亦教訓、和歌並びに聯隊歌には大楠公の精神を高調して教育の根本をなすあり。

且つ本年は恰も大楠公六百年祭が舉行されるに就いて是非共實現したき「聯隊精神の像徴」を憧れ求めてゐる三浦

大佐の熱意と、大楠公の精神を讃仰する麻殖生氏との精神が相一致するに及んだのである。

氏は早速その場に於いて銅像の建設寄附を申し述べ、直ちにその製作を依頼したものであり。斯くして臺石共一丈三尺の立派な銅像が僅か四ヶ月にして完成されたのである。抑々短日月を以て製作されたのも一に氏の熱誠の結果であらう。氏は天資調達にして寛厚篤實なる人格者である。



島田誠三郎氏

本邦棉花界の權威
大阪市西區南堀江

近時僅かに富を獲れば直ちに以て實業家亦は大成功者と謳はるゝ者甚だ多し、其の成功者、大なる富豪、若しくは實業家と稱するものを見るに多くは時勢の變遷に乗じて巨利を僥倖し、或は官僚と結び亦は政府庇護の下に事業を営み、眼中國家なく、社會なく唯だ自利に吸々として富を積みたるの類ならざるはなく、之等を指して真正なる實業家亦は成功者として謳歌するを得べきや。

勿論世の實業家の成功者の總てが斯の如しと云ふ譯ではないが、併し國家的觀念乃至社會公共の見地よりして事業を創始し、飽迄自力獨行、奮戦苦闘を積んで其の目的を達したる眞に成功者、眞の實業家と稱すべきものは甚だ尠くない、此の時に當り偶然にもあらず、僥倖にもあらず、將亦投機的でもなく、實に正しく純商賣人として終始一貫一代一業主義を奉じて活躍せる關西綿花界の最大權威として令名藉甚たる我が島田誠三郎氏の如きは初めて之れを眞正の實業家中の實業家と稱すべく亦業界の花形として業界の誇りであり、更にまた氏の其郷土岸和田市の精華として特筆すべきものである。

而かも氏が權門に阿附せず、俗流を趁はず、不義の富貴を貪らず、誠實、熱心身を挺して斯業の向上發展に努力し遂に今日の大を爲すに至りしもので世の所謂成功者与其選を異にしたる眞正銘の成功者なり。氏の事業發展盛大に伴ひ棉業王國日本の爲めに貢獻するところは偉大であり氏の貢獻を没却すべからざるもあり。

島田誠三郎氏 氏は岸和田舊岡部藩の名家島田敏氏の三男に明治八年六月に生る。氏は早くより郷土を以て青年時代に大阪府泉北郡踞尾村の豪族北村六右衛門一族の經營する北村銀行に入り、其俊敏ミ機才、縱横の快腕を

認められ同行大阪支店長に拔擢され同行の爲め懸命の努力いたし一地方銀行は東洋の商工都市大大阪の金融界に重きをなしたるは全く支店長に其の人を得たからである。

由來銀行業の基礎は信用にある、勿論信用を得るの途は實に支店長の人物如何にあり、世人が首と掛替への大切な財産を預託する處であるから必ず一般に注意するのが勿論である。

然り田舎の一地方銀行が堂々たる一流銀行界に互して雄々しく商戰場裡に奮戦するには支店長の人格、識見、手腕が具備せなければならぬ。同行が地元よりも寧ろ大阪財界に羽振りを利用したのが實に支店長島田誠三郎氏の人物に俟つところが多かつたのである。氏が同行を一人前の銀行に仕上げ置いて後進に道を開き萬人の惜まるにも拘らず、同行を退き頗る先見の明ある氏が棉業の日本の將來をハッキリと認識し單獨にて現在の棉花業を開業し以來氏特有の誠實第一主義を以て營業し遂に今日の如き大大阪第一流の棉花業に大成功を爲したのである。

氏が人に接して駄辯を弄せず、加ふるに溫柔恭謙名利の爲めに一事一物決して苟もせず、營業方針の上に於いても何等の駆引きなく術數なく一言一句其語は肺肝を衝いて出で來らざるはなく、流石武士の家に産れたるだけあつて古武士的の面影があり古諺の通り土魂商才とは氏の爲めに貽された言葉そのまゝである。藍し氏を一言にして評すれば徹頭徹尾、誠實一貫の人である。

本邦斯界には氏以上の財産家もあれば亦地位、名譽、學問のある人もあるが尙一點の疑ひなき人物は甚だ少ないが然るに氏に一度氏の溫容に接すれば其一言一句皆信義誠實の結晶として聞ゆるは到底他に見られない氏の美德があり

ありと現はれてゐる。

而して氏が少しもコセ付かないで應揚な何となく静かな林の如くユツタリとした處がある、而してまた氏の容貌にまで實厚と同情と平和の波とを湛へてゐる實に氏は平和の神の旅宿か若しくは宮殿のやうである。

尙曾つては泉州財界の大立物市政界の大恩人故島田良藏氏、また我が保険界の鬼才として保険界一方の重鎮として令名赫々たるものありたる共同火災保険株式會社専務取締役故廣瀬耕治氏等が令兄である。



兒山保之氏

富田林銀行重役
泉北郡東陶器村

我國の地主や家主程頑迷なものはない、小作人や借家人を見ること恰も奴隷の如く殘忍誅求を極め唯己れの懐ろを肥さんことのみを圖つてゐる。斯の恐るべき幸徳秋水事件に關係した村近雲平の如きは曾て岡山縣農業技師として在職中岡山縣の悪地主の横暴に憤慨して遂に無政府主義に投じたこと云ふことである。

實に恐るべきことでないか、されば之れを避ける方法とはいへば政府の力を藉るのは抑々末の末たる問題である。先づ大地主が反省し小作人と互に相愛し協調的觀念を強くして行くことが最も必要である。

然らば大阪府の大地主に於いて斯る觀念を有して居るものが果して幾人あるであらうか、然り幸にして地方の稀有の名門にして大地主である、兒山保之氏の如きは小作人と人類相愛の精神を原則として互に相扶けともに生き、共に暮すことを唯一の樂としてゐる。昔から兒山家には小作人と相争ふことがなく、昔も今も何等異なることなき大地主と小作入との美風は嚴然として貽つて居るので獨り兒山家の誇りのみならず、實にまた以て我が國の誇りである。

今日の如く階級意識が判然と自覺し、動もすれば鬭争的意識の兆候の見る秋に此の兒山家の美風、美德、仁善は活きたる典型として世の範たるものである。

兒山家は其祖五百年前に發し、累世同地に住み連綿として今日に到り泉州屈指の豪族にして由緒いとも正しき名家である。氏は明治二十年生にして明治四十年府立堺中學校卒業直ちに一年志願兵として第四師團輜重隊に入營軍務に精勵し後、陸軍輜重兵少尉に任官し歸郷す。而して郷土に在りて郷軍の強化を強張し自ら第一線に起ち在郷軍人分會の爲め總ゆる犠牲を拂ひ、努力奮闘し遂に全國優秀分會として泉北郡聯合分會は赫々たる名譽を得るに至りたるも全

く氏の熱誠、氏の忠君愛國主義の爲めである。

氏の嚴父養守氏は曾つて大阪府立農工銀行重役、兒山銀行頭取として其崇高なる人格と熱誠を以つて關西金融界に盡したる功績の如きは決して没却すべからざるものである。

氏もまた、嚴父の後を繼ぎ兒山銀行經營し現に富田林銀行取締役として地方金融界の爲め多大の努力いたしつゝあり。氏は非常な愛國家にして其一言一句即ち口を開けば忠君愛國を説き其熱誠、其愛國心は實に徹底してゐる。

何人と雖も一度兒山氏の所説を聞かば肅然として襟を正さざるを得ない、然り、現代日本に於いて最も缺乏せるものは國家的觀念である、思想國難と云ひ、經濟國難と云ふ畢竟愛國心の弛廢に起因する外ならぬ。國民精神の中心、戮力協心の氣魄と皇國の本質に對する確乎たる自覺とがあつたならば克く國家の危殆を救つて忠義なる皇國民の任務を果すことが出来る。

我等に取つて國家は我等の宗教である。國民が一切の分類を脱却して統一せられたるものは唯だ萬世一系の皇室を中心とする國家でなければならぬ。即ち國家本質に目醒めて國民獨特の個性に甦り國民自體の信念と理想と生きること、歸すと斯くの如き雄しき信念のもとに日夜愛國の志を失はずして常に地方青年の爲め多大の犠牲を拂つて奮闘努力せらる兒山氏の如き富豪を得たことは唯だに泉北の爲めのみならず、實に非常時國家の爲めに慶賀すべきことである。

而して天資頭腦明晰なるが故に慧眼能く理非を省察し熟慮果斷、而かも其態度は田舍金持の通有性たる威張散らす

やうなことは薬にしたりともなく、極めて民衆的にして友人の難に赴く義侠もある所謂資本家の涙を分拆したら只鹽分と水分のみといふ人の多い中に氏の如き人間味豊かな紳士の存在は寧ろ奇蹟的である。

令閨愛子夫人は泉北郡上神谷村豊田の名家小谷家に生る、小谷家は平頼盛の裔にて其邸宅は小谷城址である。



田中正治氏

泉州の名家
大津町助松

西洋の諺にも『榮譽は高貴の條件に附隨するものにあらず、各々其力を職務に専らにすれば榮譽は其の中にあり』と言つてあるが、兎角我々は此の教訓を忘れ、榮譽の爲めに心の平和を破り、動もすれば虚名に憧がれ、實際を軽する虞れがある。

併し實際の價値以上の名を得んとするには不自然の行爲で、實の伴はざる名は即ち虚名である。而かも名を求むるに急なる人は己れを廣告するに苦しみ、如何なる方法を以つてせば自己の名を世間に知らしむることを得るか、日も亦足らぬ心地して其名を得る爲めに策畫する有様は傍から見ても笑止千萬である。此時に當りて名譽もいらず、金もいらぬ、唯だ國民の幸福の爲め、社會の公衆衛生の爲めに、過去三十年來一代一業主義を信条として、終始保健衛生の爲めに一身を犠牲にして奮闘努力せる泉州の名家として亦舊家としての遺風薫る遠州園主、田中正治氏の存在は實に泉州の精華のみならず、國家の誇りとして世に讃へたいのである。

國民が舉國一致非常時を突破するに於いて先づ健康が肝要でなくてはならぬ、然して保健の重大なることは言を及ばず、社會の生活、安寧、秩序は一に保健に依つて保持せられ國民生活はそこに幸福と安泰の基礎を見出してゐる。若し衛生施設なり普及が一日もその活動を停止したらん場合、社界生活は如何なる状態に陥るべきかを、世に之より大なる不安はあるまい。然るに世人はこの衛生施設の恩恵を十分によく意識してこれに衷心より感謝を捧げてゐるかどうか、事實は寧ろ敬遠せんとし、或はこれを輕視せんとするかの風さへあることは甚だ遺憾の極といはねばならぬ。國家の興隆は先づ國民の健康に待たねばならない、健康を欲する上は大自然の健康地を撰ぶことは最も必要である。

その日本一の健康地としては大津町助松海岸である、この海岸の約一キロ、廣袤三萬五千坪に亘る遠州園は理想的の健康地として推奨されており、當園の所有者は田中正治氏である。

田中正治氏は明治四十一年京都帝國大學醫學部卒業の醫學士であるが臨床家でなく、何等の野心もなく、名譽心もなく、利慾もなく三十數年來一日の如く孜々として國民の保健衛生を研究され人界の天使である。子供の樂園建設に多大の犠牲を拂つて努力されつゝある。

その田中氏が多年苦心研究の結果、助松海岸の遠州園を全部學童の保健の爲め無償提供し、海水浴場を設備し、更に海邊に家を建設して來れ日本一の健康地へと呼びかけてゐる。

遠州園 は南海本線助松驛西二丁の助松海岸にあり白砂青松理想的の健康地にして、西に詩、夢の國淡路島の淡謁を眺め、北に摩耶、六甲の翠巒を望み、東には金剛、葛城の靈峰を罩め、前に波靜かなるちぬの海に臨んで實に大自然と和樂する海水浴、キャンプこそ都人憧れの別天地である。

今では遠州園は大阪の學童三十萬に教育會助松學園として、また幼稚園兒には童の里、海邊の幼稚園として、なほまた少年團のキャンプ場として廣く解放されてゐる、海濱には毎日數千の可愛い河童達が氾濫して大賑ひを呈し、さながら童の樂園と化し、保健の理想地として有名である。

遠州の起源 田中遠江守の陣屋の趾は當主田中正治氏の邸地である。田中遠江守重景の先祖は新田氏の出にして上州新田郡田中村に住せしより田中姓を名乗られし由、元龜年間當地に來りて本地を領し、天正四年五月信長が

石田城を攻むるに當りて間部主馬兵衛と共に信長の招に應じて佐久馬右衛門尉信盛と同年七月十五日毛利勢と戦ひて大阪川口に戦死し、同月二十二日遺骸は牛瀧塚に歸葬せらる。

田中家は即ち遠江守の後裔にして遠江守陣没後子孫は郷土となして代々大庄屋を勤めその邸宅は紀州街道に沿ふてゐるので往昔は紀州侯參勤交代の時には休憩所になつてゐた。庭園は片桐右見守貞昌の臣藤林宗源の築きしもの、庭中に片桐且元遺愛の石燈籠等あり、而して田中家には古文書多數所藏せらる。

また文久三年の大和天誅組の義舉に加はつた田中楠之助も同家の出身にて、田井二郎と改名後、老軀に至るまで名譽職を勤績し、助松海岸に防風、風致をかねて自ら率先して一帯に數十萬の松樹を補植した、現存勝景を爲す鬱蒼たる松林は即ち之にして田中家一門が助松に與へた大小の恩恵は實に枚舉に遑がない。

西風重遠氏

元代議士

和歌山市北阪之上町

凡そ人として功名心のないものはない、又功名心のないやうでは逆も向上することはできぬ。即ち功名心は向上發展を意味するもので大いに尊重しなければならぬが、併し世人の多くは徒らに虚名を焦らんとすることのみに吸々として、實力を養ひ實名を擧げんと心掛くるものは甚だ尠くない、従つて偉大なる成功は逆も出来ぬ譯である。

總て何事に依らず大成功を望まんと慾するものは、其燃ゆるが如き功名心を外に現はさず、又あせらず、さはがす沈着に構へて、靜かに修養を積み、最後の勝利を目的として志を遠大に馳せ、徐々に大成の域に進むの心掛が肝要である。

然るに近時滔々として功名心に逸り、否功名心の奴隷となつて、前後終始の辨へもなく、徒らに虚名を博せんとするものが多い。之れ即ち成功を望んで却つて不成功に終る所以である。

然るに我が西風重造氏の如きは急がず、騒がず、悠々として世に處して居る。氏は和歌山縣の名家、西風清五郎氏の長男として明治五年四月を以て生る、後前名伊之輔を改名して大正五年五月家督を相續したり。

明治三十二年東京帝國大學法科大學政治學科を優秀なる成績を以て卒業し、其後回漕業を經營し、世人の信認最も厚く推されて富島組の取締役の外武庫酒造株式會社取締役であり、和歌山縣多額納税者に列してゐる。同四十五年氏の人格手腕を認めらるに到り和歌山縣郡部より推選されて代議士となり大正三、四年事件の功に依りて勳四等に叙せられ瑞寶章を授けられたり。

氏は亦海上交通運輸界の功勞者としてあまりに有名である。曾て和歌浦を絡ぐ南紀方面の海上交通は頗る不便なる

を痛感し西風氏は率先して南紀海運交通文化の爲め多大の犠牲を拂ひて大阪商船と相俟つて地方開發に努力し、其他回漕事業を起し、今や和歌山縣切つての大事業家として、押しも押されぬ有力家である。

世の中の多くの人は私利私福の爲めに事業を營むのであるが、氏は決して私利の人にあらず、勿論金力の世の中では自然の結果として多くの人が私利の人となり、私福の人となるのである、殊に現在の資本主義の社會にありては此の弊風最も甚だしく、殆ど風をなしてゐるのである。

若し西風氏にして單に私利私福を期するにあらしめたならば氏が今日の勢を以てせばどんな希望でも達し、どんな目的でも遂げられないことはないのである。

然るに氏は敢へて其事をせないのみならず氏の希望はそんな小さなものではない、モットヅツト大きいのである。試みに氏の生ひ立ちを案するに強ち金ばかりの爲めに實業家に志を起したのではない、茲に深い原因があるのである。則ち和歌の浦を連らむ南紀は海運交通不便の爲めに山村、漁村は甚だ衰へ自然人物に於いても活氣がなく、守舊靜止、自大思想、自己尊大の者多く、益々衰態なすより外はなかつたので、此の現狀を觀たる氏は此の儘放置せんか遂に郷土の救ふ可らざるの窮狀に陥るを歎き、先づ以て地方開發せんとすれば陸上交通と俟つて海上の運輸至便にせなければならぬと奮然起つて回漕業に身を投じ、多年苦心慘膽の結果遂に今日の如く大阪商船南紀航路の發展に至らしめたのである。

氏の希望の通り孤軍奮闘の努力は酬ひられ、その勞苦は判然として地方民は擧つて西風氏に感謝の聲を上げてゐる

氏は性謹厚篤實にして毫も虚名を思はず、學識を誇らず、家柄を笠に着ず、財産を鼻にかけて威張る等のことなく人を遇すに厚く、従つて欽慕に堪へざるものがある。
蓋し和歌山紳士界に於いても遙かに一頭角を現はしてゐる典型的の紳士である。



武本謙吉氏

汎愛尋常小學校々長
大阪府泉南郡貝塚町

盆、正月に貧乏人は砂糖袋を買つて金のある雇主や親方や家主や差配人の所へ持つて行かねばならぬ、夫れが階級維持の美風だそうである、只一つどう考へても美風でないのは學校の生徒が教師の私宅へ盆、正月の贈物をせねばならぬことである。贈物のことを嚴密な意味で云ふと法律では賄賂と云ふ、學校の生徒が盆、正月に先生へ賄賂を贈らねばならぬとは誠に困つた階級維持の惡制度でないか、學校は正義人道の人格を修養する所である。但し夫れな昔の私熱のことで全部の學校と云はぬがその多くの學校は正義にも人道にも人格にも少しも關係がない、それだから先生は平氣で生徒から賄賂を取る、賄賂を持つて來ぬ生徒には先生の御機嫌が悪い、幼い生徒は盆正月には賄賂を贈らねばならぬといふ實物教育を授けられるのである。

言語で正義人道を説いても行ひが悪ければ何の役にも立ちません。書物を教へる先生が賄賂を取る實物教育を授けたのでは幼い學生の頭腦はどんなになりませうか、思ふても嘆息すべきことである。

昔の少年には元氣があつた、野心もあつた、生徒が先生の私宅を訪問することさへも因縁情實を作る罪惡だとしてゐた。夫れに今日では都鄙を通じて盆、正月に生徒が賄賂を贈らねばならぬとは、何たる墮落であるか、今日の少年に意氣がない、野心がない哀れな現實的の虛榮、黄金以外に人間の價値あるを知らなくなつたものだ、虛榮を打破し眞に人間の價値を尊重せしめる教育とならねばならぬ。學校の教員は確に薄給である、しかし薄給なことは決して賄賂を取る理由とはならぬ、薄給ならば破れた袴を纏い、靴の代りに尻切れ草履を穿き、帽子の代りに頬冠でもして登様するのが善いのである。

教員に此の元氣があれば國民教育は實に理想の域に進む、學校の教員に意氣がなく、賄賂を取つて迄も虛榮の生活をしようとするので教はる生徒が精神的の不具者になるのである。破れた袴を纏ひ尻切れ草履を穿き頬冠して先生が登校すれば生徒は「何故」と疑ふ。其時斷然大に人間の價値を説くのである、今日の不合理な資本主義の改造すべきことを教へるのである、形式張りの政治や上に厚く下に薄い官吏の俸給制度が學校の先生を如何に窮せてゐるかを語るのである、教育は虚偽の化粧ではない。此如教育界腐敗墮落の深淵にあつて燦然として我教育界に光輝を放つものは世界一の小學校、世界一の小學校長と内外に普く鳴り響く先生は我が大阪市東區汎愛小學校長、武木謙吉氏である。氏が大阪府泉南郡貝塚町の出身にて曾て大阪市視學として多年教育界に貢獻し、氏の非凡なる手腕と崇高な人格と古武士的、而かも教育は人を作るの定義とする氏の教育方針と東區有志が認め區民の熱望により現職の任に就いたのである。以來船場の子弟を教養し長き月日櫛風沐雨一日として業を廢することなく以て今日に至つたのである。

氏は甚だ失禮な云分であるが一小學校長として普通より云へば餘り世間の注視を惹くべき人ではない、けれども氏が貴顯紳士又は幾多の青年より殆んど大學教授以上の大人物として崇められ、神の如く敬慕される所以のものは實に氏の崇高なる人格に因るものである。

氏が更に名利を趁ふの念なく、また地位を冀ふの野心なく唯夫れ東洋の商工都市大大阪の子弟の指導教養を以て天職となしてゐる。氏の玲瓏玉の如き人格、靈火的熱烈なる至誠、古武士的教育方針を讚美され各方面から榮位を以て而かも辭を卑ふして招けさる往かず、またそんな好餌には一瞥を與へない名利に淡きこと氏の如きは有らず、子弟の

薰陶に忠なる氏の如きは有らず、氏は實に教育界の重鎮として大大阪市教育界の異彩である。

而して氏が一度口を開けば忠君愛國教育第一主義を説き、其熱誠、其愛國必は實に徹底してゐる。何人と雖も一度氏の所説を聞かば肅然として襟を正さざるを得ない、然り現代日本に於いて最も缺乏せるものは國家的觀念である。思想國難と云ひ、經濟國難と云ふ畢竟愛國心の弛廢に起因する外ならぬ。國民精神の中心、戮心協力の氣魄と皇國の本質に對する確乎たる自覺があつたならば克く國家の危殆を救つて忠愛なる皇國民の任務を果すことが出来る。我等に取つて國家は我等の宗教である、國民が一切の分類を脱却し統一せられるものは唯だ萬世一系の皇室を中心とする日本の國家でなければならぬ。即ち國家の本質に目醒めて國民獨特の個性に甦り、國民自體の信念と理想と生きること、歸すと斯くの如き雄々しき信念のもとに日夜愛國の志を失はずして、おのが天職とする國民教育に精勵しつゝある武本謙吉氏の如き教育家を得たることは唯に大阪市の爲めのみならず實に非常時國家の爲めに慶賀すべきことである。

井阪平一氏

天下の銘酒『戦功』醸造元

泉南郡山直町

天下の銘酒戦功は井阪平一氏の吟醸である、氏の名聲を天下に走すると共にその吟醸は更に一段の輝きを以つて世に傳はりぬ。攝津の灘、五郷と泉州の地とは一線灣形を示せる海岸線の隣邑たるに過ぎざると雖も中間に大阪市を入れて左右に袖を分ちたる兩地は地形上に於いても自然の異別を止め、交通の便に於いても一は省線に阪急、阪神に沿ひ、他は南海、阪和を新たに踏まざる可からず。

而して酒の特色に於いても然り、灘に淡白を喜び、泉州は濃釀、醇味を尊とぶ、正宗、白鶴、富久娘の名は聞くか
らにスガ／＼しきを聯想せしめ、戦功は温雅、清爽、清新の氣が溢る。

戦功の名はなんとなく雄大男性的なるを意味すべく思はしむ、櫻花の散り易きは其の醒むるに早きを意味し、牡丹の天艶情に濃やかなるは雀百までの感を起さしむる。而して一擲千金の千日前、道頓堀の不夜城に流連する酔客は醒むるに能ありて切揚げの疾きを良しす、斯くして晩酌二合の酒は家庭を温めて永く酔ふに徳あり、此の點に於ける戦功は日本の一夫一婦濃情多血的意味に叶はむ哉。

井阪氏は泉州の名家井阪家に生る、氏の嚴父は元府會議員の要職に在り泉州の政界、實業界に巨星としてその令聲は輝きたり。

氏は若くより純粹な前垂れ掛け商人を志し、嚴父の創釀にかゝる天下の銘酒、戦功を吟醸し之を唯一の家業として天下の銘酒戦功に錦上更に花を添へるべく苦心研究一意専心、品質の向上、販路の擴張に努力する傍ら山直町の産業興隆の爲めに全力を注ぎ町商工界に甚大なる功績を貽してゐる。

山本政太郎氏

大阪株式取引所取引員
大阪一の履物問屋
大阪市日本橋筋二

尊王敬神の大義を高唱する山本氏

吾が大日本帝國は云ふまでもなく萬世一系の天皇を戴く立憲君主國である。而かもその天皇は畏れ多くも我々國民の御宗家におはしますのである。現代世界に於いては斯くの如き君民合一、一君萬民、君臣一如の國體を有する國は他にない、皇帝を失つた國は臣民中から新たに皇帝を作るとは國民が快としないから、共和國であるの外はない。イギリスと雖ども二百餘年前ハンノウ家ジョージ一世が王位に即かれたのである。ベルギーは百年前ドイツ皇族レオポルトを迎へ入れて國王に推戴したのが初めである。連綿として二千五百九十五年、一系の天皇を戴く吾が大日本の權威と氣品とは實に世界の美望とする所である。

大日本天皇は階級の光ではない、全民族の光だ、いな更に進んで全世界の光でおはします、全世界をして大日本、天皇の御光徳を讃仰せしめなければならぬ。而かも吾皇室は我々の御宗家であらせられ、歴代天皇は一家に一家長を有する日本全家族の大家長であらせられる。小家長に對する孝、大家長に對する忠、それが何の矛盾もなく兩立し且つ合一することはありがたき我々の幸福でなくて何であらう。

忠孝一本の心を以つて家族に對し、人に對し、社會に接し、而して國家に向つて行く。これこそ實に力強い處世の第一要件と謂はねばならぬ。然るに近時西洋の學說の熱に浮き此の尊き光輝ある我が國體を云々する國賊亂臣、不義不忠の醜輩が横行することを憎みても餘りあることである。

茲に於いて敬神尊皇は我國體の基礎にして古來萬民之を體して悖らざるものなりと固き信念を有す山本氏は此の醜き世相を傍觀するに忍ばずと奮然起つて先づ氏の郷里である和歌山縣伊都郡學文路村天滿神社境内に巨額の費を投じ皇宮遙拜所及鳥居一基を建設寄附し、其竣工式を本年四月三日の佳節に盛大に舉行し以て村民に國體觀念を徹底的に強化せしめた。

尊王敬神の美風は我建國以來の遺徳にして由つて且て國威を九天に掲げ、以て邦家を泰山の重きに置く、神州の是に於いてか起る、而かも方今泰西思潮の移人と共に輕薄、事の本末を解せざる徒輩、往々之を蔑視せんとするの傾向を見んとする秋に當り忠君愛國の爲めに老血を燃やす我が山本政太郎氏が如き尊王敬神家の存するありて、能く大義を唱道して群衆を啓くに力むるは眞に邦家の爲め慶賀すべきである。

因に氏が皇宮遙拜所寄進に際し學文路村々長に宛てたる寄進書を掲げて如何に氏が尊王敬神の思想が旺盛であるかを裏書せしめん。

遙拜所設備寄進書

一 遙拜方向表示石 一 基

一 鳥居 一 基

輓近社會思想の動搖著しく日本魂の漸衰を深憂されます凡そ國家の盛衰興亡は國體の觀念強弱に歸因し特に

わが國體は萬世一系の 天皇國土を統治し給ひ臣民その無窮の御聖徳に浴して生活の安定を得、海外諸國の如く國民あつて元首を立つるものにあらざる世界無比の君國であるから國基は萬古揺かず、超然國威を四海に輝かし得るのである。故に皇室を中心とし之を尊崇敬重するの精神を修養強化することは現下絶大の急務なることを信じます。

この思想涵養の寸時も忽にすべからざるは勿論ながら更に機會ある毎に皇祖皇宗崇拜の儀禮を敦くし特に國本觀念の激勵作興をを圖することは一層重要であると深く感ずるのであります。現時遙拜所の設置は重要都市に夙に行はれてをりますが、地方町村には未だ普及されてゐないやうに思はれますから不肖政太郎常に之を遺憾とし先づわが郷黨に之を建設し聊國本培養に資せんことを庶幾し今次頭書の設備を天滿宮構内に施し本村に寄進致したる次第であります。

希くは有志各位幸に不肖の微衷を諒せられ平素に記念日に將た有事の際郷黨の父老青年少年等を將て茲に遙拜の儀禮を行ひ苟も形式に流れず赤誠忠君に勤しみ以て國體觀念の強化に盡瘁し給はらば本懐の至に堪へませぬ。

謹んで述ぶ

昭和拾年四月參日

學文路村長 小西保三郎 殿

山本政太郎

總支配人 松永定一氏

女は男に従ふものである。女の従ふといふのは男の奴隸たるにあらず、女の性の然る可きものである。人間の中には幾多の種類あり、幾多の因縁ありて朋友も生じ同志も生じ主従も生じ知己も生ずるのである。

然れども是れ自然の合性といふものに由りて分る、剋と剋と合へば相討つて火を生ずるに至る、鐵の如き意志のナポレオンには柔和なる秘書役は必要である。

漢の木強、漢には強子房の如き周密なる思慮ある良參謀を必要とす。人の中には名を取る人、實を取り即ち十臺となる人もある。

松永定一氏は何人ぞ、楚々たる一風才子の如き人にあらず、支配人として適材なるも器度知る可きのみといふは未だ氏の氏たる本分を知ること能はざるなり、沈黙せる氏、柔和なる氏、女房役たる氏は氏としての本分を最も理想的に發揮するものとせば如何、氏も亦一人物にあらずといふ可からず、故澁澤男は在世中が日本百般の事總世話役として立働いたが其道具建に苦心し其間に取次となり、用具となつてゐた。我が松永定一氏が山本王國になくはならぬ良參謀である。

昔森蘭丸は織田信長の寵童であつた、才氣群輩を凌ぎたるは明智光秀と如何なる確執を生じたか、部下人材如何に由りて其主人の運命を危くし事業を亡びに導くものあり、山本王國が其社員、其支配人の良否は大切なり、余は參謀

に一つの定義があり。

曰く一、社長たる人に愛せらるゝこと。

二、風采舉動の見憎くからざること。

三、人事及社會的常識發達して社長たる人の用務に事缺かざること。

四、圭角なく温順にして社長たる人を形とすれば影となり得る人たること。

以上の要素を備ふる是れなり、支配人に共通なる資格といへば先づ如此く云ふのである。支配人の任務は我が儘や怠惰者や短氣者や粗略たる者の勤まる可き事務にあらずして此に掲ぐるが如き數個の美點を併有するにあらざれば夫れ不可能である。

松永氏が年齢僅かに二十五歳にして天下の故松井伊助氏の支配人たりしことがあり、松井氏が生存中の一日和歌山市の本邸にて小笠原君と亡くなつた關日の梶原ミ余と清談の砌たま／＼談が松永氏に移り、松井氏曰く

『俺とこの松永は年が若い中々確り者だ、將來必ず大成する天分を豊かに持つてゐる』

云々と言はれた。事實確かに氏が度胸もあれば、頭腦も明晰、神秘的の手腕を藏して居る。

然し氏は他の支配人の如く社長の外套を取り帽子を持つが如き風の支配人にあらずして、堂々たる温雅なる紳士である。山本王國が業界の巨星と燦然と光るも松永支配人に負ふところが甚だ多い。

十場 吉太郎氏

東洋麻糸紡織株式會社取締役

關西製綱株式會社常任監査役

岸和田市南町

由來岸和田市には未だ社會に顯はれざる隠れたる奥床しい人物が相當に多い、我が十場吉太郎氏の如き孰れも市政界、實業界の一方の重鎮と稱するの人たるに拘らず、未だ多く世に知れざるに至らざる所以のものは進んで利を趁ひ名を銜はざる篤行の士たるにようにべく十場家は代々米穀問屋を本業として泉州斯界の一大權威として令名噴々たるものありたるが現在では廢業してゐる。

氏が故寺田甚與茂翁に私淑し、また甚與茂翁も生存中は氏を我兒の如く愛し故人が事業を起す毎に必ず氏が影の形に如く附添ひその信認極めて深刻であつた關係上泉州事業界に相當貢獻致してゐる。

また政治的方面に於いては大正五年三月二日岸和田町會議員に當選し、次いで大正九年三月再選なり、氏の任期中に例の市制問題が勃發し、賛否兩立したが元來甚與茂翁が市制早尙の急先鋒であつた爲めに氏が表面にこそ現はれて花々しき活動はなかつたが陰において大いに島田委員長を助けてゐた。

斯くて大正十二年一月十三日新岸和田市成立と共に第一回市會議員に當選し大岸和田市建設の爲めに多大の努力し市政界一方の重鎮として市民に非常に信望ありたるが其後市政界を勇退し、氏が特意の經濟界に乗出し現に東洋麻糸紡織株式會社取締役、關西製綱株式會社常任監査役として活動してゐる。

謹嚴温良なる人格と加ふるに巨萬の富と機敏なる腕の冴へを見せて隠然重きを爲してゐる。

上山英一郎氏

本邦產業界の殊勳者
和歌山縣有田郡保田村

我國は古來瑞穂國と稱し農を以て立國の基礎となしてゐた、然れ共維新の開國と共に今日に於ては地勢上より推論するも商業國たるに適せりと云ふべく、否世界貿易の中心市場たるに適當してゐるのである。

殊に亦我國は南洋に近く一帆若し貿易風に乗せば、汽力を藉らず棹櫂を要せずして、直ちに南洋の諸島に到り、濠洲大陸と往復することが出来る。是亦日本特有、天の我國に恵む處で、斯の如く深く且つ大なるものがある。

然れ共地を用ゆるは人にあり、彼の英國は地形の便日本に及ばざること遠く、然るに其商業の盛、富力の大なる所以のものは其國人が皆勤勉の結果である。故に日本國民たるもの若し何時迄も東洋の仙人國を夢想して商業を振張し外國貿易の大策を劃さずんば此の世界最便の地も何かせん、天恵地福も亦何の用もなさぬであらう。

就中紀州は大阪、神戸兩港の東洋貿易の五市場を有して居るにも拘らず、紀州人で貿易事業に従事して居る人は殆どないではないか、何ぞ斯くの如く貿易思想の發達しないであらうか。紀州の人物いづれも慙くの如きの時に當り、偶々上山英一郎氏が早くから自ら貿易の第一線に立ち日本産業の爲めに極力盡瘁せられつゝあるは吾人の最も感謝する處である。

由來紀州には人物が澤山あるが吾人は現代の紀州人に大不平を有するものである。その理由は何れも藝妓買ひと空威張と鍍金細工の俗臭粉々不謹慎極まるものが多い。殊に商人に於いても大いに海外貿易に飛躍し、各市場に威風堂々外國品と競ふ勇氣に欠けてゐる。此の時に我紀州人にて世界市場に外國人對手にジャバン・カミヤマ・コンパニーとして慧星のソレの如く實に電撃的の光芒萬里を照らし、精彩を放つ紳士は和歌山縣有田郡保田村出身の大日本除蟲粉

株式會社前社長上山英一郎氏である。

斯る俊傑世界的紳士を得たことは眞に紀州の精華であり、實に青年子弟の活きたる教訓であり、典型であり、龜鑑であり、亦紀州人は他に向つて大いに誇る所以である。

大日本除蟲粉株式會社は我國に於ける海外輸出貿易の首位を占めつゝある除蟲菊の生産にして、その年産額一千餘萬圓の巨額に達し、然も其營業の方針の周到、會社の基礎の強固には到底他の追隨を許さず。その重なる輸出先は支那、南洋を初めとし、英、露の諸國は云ふまでもなく遠く南米、南アフリカにまで達して大々の盛況を來してゐる。

斯の如き大日本除蟲粉株式會社が今日の隆盛を極むるに至りしものは實に創始者上山英一郎氏の奮闘努力の結晶によるものである。

上山英一郎氏は和歌山縣有田郡保田村の名族上山家の六男として慶應三年二月に生る。上山家は藤原鎌足に出で累代門閥を以つて鳴り、英一郎氏の祖父勘太郎氏は地方の公益事業に盡瘁せるところ多大にして、紀州特産物として世界に誇る密柑の栽培者であり且之が販路の開拓に努力されて山勘の名聲は東西に轟かせるの一大傑物であつた。

斯の快傑祖父の血を受け繼いだ氏は幼少の頃より俊敏の才と霸氣とに富み、故郷に座住するを心良しとせず滿々たる大望の志を抱いて明治十五年十六才にして先輩森下氏を頼つて東都に走り、神田の進徳館に入り學を修めて後立教學校に轉じて英人に就いて語學を學び更に慶應義塾に教育を享け特に福澤翁の薰陶に浴せり。然るに學將に成就せんとする矢先不幸猛烈な病魔に禍ひされ、涙を飲んで歸郷し、専ら瘧病につとめたり、斯くして三年の月日は經ち幸に

病は癒へるに及んで再度上京初心の貫徹を圖るべく勉學を切願したれども、親近者の許さざるを以て、方向を轉じて茲に産業界に貢献せんことを深く決意し奮然として起つたのである。

而して親の財産を的にせず飽迄獨立自營、自己の双腕に頼り大々の奮起せんことを誓ひし所に偉大なる氏の面目躍如たるが窺はれる。恁くして氏は殖産興業界に身心共に傾倒して名を成し世に益せしむと銘じ貿易なるものは最高なる職務なりと感じられ、専ら産業界裡に注がれたのである。

時恰も明治二十一年大暴風雨に際會し同地方の柑橘樹悉く粉碎されるに至るや氏は眞先に苗樹を買占め之を廣く罹災民に分頒して他を救済し、以て自らも多分の奇利を得たり尙亦越へて二十三年縣下に大洪水が襲ひ陸路の交通を杜絶して爲めに食料品の供給全く斷たれ飢饉に瀕する罹災民の窮狀に深く懸念して商才の發揮する所となり航路船舶を利用して紀北紀南方面への廻米を圖り且之を安價にて配して罹民を救済する等の義侠的情誼に因るものである。

氏の事業の信條として自ら利すると同時に他をも利せしむべしとあり、爾來氏の事業の成功する所は必ず國家社會にも顯著である。

紀州密柑が日本國産の一として海外より賞讃的となりしは爲に言を俟たず、而も其の上に安東縣、大連、浦塩斯德等の塞地に輸出する等此の名産物の聲價を高揚し且つ販賣域を擴張して輸出額の増加を圖導したる者は實に上山英一郎氏の功績に依るものである、然して露、支那人より我紀州密柑をば上山柑の名を以て呼ばるゝに至りしなど斯因に歸するものであらう。

尙亦除蟲菊の殖産輸出、發明改良に就ての功績やまた我國産業界に永久に没すべからざるの勳功を馳せたり。

抑も上山氏は米國殖物會社員エイチ、アーモア氏が來遊されしを期會に面會して氏の國産の密柑少量をアーモア氏に託して米國へ輸出した、之れ實に本邦密柑の米國へ進出は嚆矢とせられてゐる。尙亦氏は竹、秋菊、棕梠等の苗を彼に與へたところ彼より御禮として除蟲菊種子一袋を送附されしを以つて之を試作を爲したり是即ち我國に於ける除蟲菊殖産の嚆矢であつた。

斯くして氏は除蟲菊の栽培の前途有望なるを洞察して大いに努めた外に廣く栽培方を熱心に勸めて蚤蚊其他の殺蟲劑の卓効を奏する法を研究して廣く世人を驚嘆せしめるところとなり全国各地に於いても栽培を奨励する所多く今や繁盛を來したり、上山氏の必生の努力を傾倒した結果が遂に酬いられて本邦主要物産として海外輸出の理想が實現されたのである。

上山英一郎氏の除蟲菊殖産並びに柑橘界の奨励に盡粹し國家公益に貢献せる功績の偉大なるものあるによりて明治三十九年大日本農會總裁伏見宮貞愛親王殿下より綠白綬章を授與せられ、同四十年和歌山縣知事より表彰狀に成申證書衍義並に桐葉御紋章硯箱添付を授けられ、續いて四十三年十月この事畏くも天聽に達し、藍綬褒章を下賜せられ、越へて大正十一年聖上陛下が攝政宮にお在す時、和歌山縣下に行啓遊ばされし砌り、氏に御拜謁を賜り、除蟲菊事業に付き種々御下問の光榮に浴したり。

氏は前記の如く大日本除蟲粉株式會社前社長の外に共同信託株式會社取締役、其他各會社重役ユーゴースロブイア

國名譽領事、等の要職に在り今や氏の名聲赫々として我産業界に實業界に輝いてゐる。

また氏は非常に愛國心の旺盛にして紀州の同業者の其多くは保守的にして進取的思想に乏しく自から抽んで他の同業を凌駕し紀州特産をして更に一頭角を現はし益々其販路の擴張を企つるが如きは稔綫とし、慧星を見るが如し。

僅かに自己の利益のみに汲々として敢へて他を顧みず、甚だしきに至りては同業者をして製品上或は販路上に妨害を加へて恬として恥づる色なく全く一時を眩暈すべき粗製濫造のものを製産し、商業上に於いても商業道徳を無視するの醜態續出し、従つて取引先が紀州人輕視するの傾向ありて自然業界は廢頹するより他はない。

之を上山英一郎氏が非常に憤慨し夙夜別なく自ら第一線に起ちて總ゆる犠牲を拂つて努力奮闘爲し、遂に氏の熱、氏の勇氣、氏の正義、氏の愛國的魂性を天の照覽するところとなり今日の名聲たるや赫々として光輝を放つに到りて最早紀州の上山に有らずして日本の上山英一郎氏に成功したのである。

上山氏の家庭

人生至大の快は家庭の圓滿に依り得べきものなれども、悲しい哉、我國の紳士なる者は未だその眞味を知らず、彼等の家庭を見れば妻女は空閨孤衾を擁して燈影豆の如き行に流連幾日尙歸らざる良人を待たざるべからず、破寵火氣既に絶え空櫃飢に迫るも、貞婦の名を得んが爲めには前夜袖を絞つて尙孤獨の生を送らなければならぬ。若し妻に忠良にあれば、社會はそれを賞揚するよりは寧ろ輕侮の眼を以てこれを視、新聞紙は冷笑の好材料として常に嘲罵を加

へつゝあり、妻に甘いと云ふ事は寧ろ日本紳士の大恥辱の如くに考へてゐる。

斯くして妻は愈々虐待され、愈々蠻行せられ良人は益々遊墮に耽る、紳士の家庭は斯くして腐敗しつゝあり、此の如き臭氣粉々たる紳士の間に我が上山氏の家庭は實に純潔そのものである。

氏は常に家庭に起臥する紳士である、極めて品性の高き人である、更に理想的の紳士である。温きの麗はしさ、圓滿なる家庭のうちより由來偉人傑士が現はる、家庭の主人たる婦人慈母がホームイントラクションに負ふ所に多きは勿ではあるが、温かき、美はしき、圓滿の家庭的原人は主人公たる男にあり即ち男は之が家庭の主人にして婦人——慈母は家庭園の帝王である。

前者は快樂と慰藉とを恒に其婦妻、愛子にも與へ、後者は其天職の第一要務たるべきグットインラクションを見女に施すのである。

是故に圓滿にして、麗はしく温かきホームには主人の篤行を要し品性を要し、人格を要し、慈母にも亦移出的の愛情、崇高の淑貞操徳を要するのである。

氏の家庭は恒に平和であり温良である、宛かも春風梢を吹いて流鶯の止まるが如き誠に霽々掬すべきである。

氏は聲色を近づけず、端嚴目戒格らざるはない、故に氏のホームには自然の高韻がある、まるで天琴の喇唳を聞くやうである。平居卑野にして居常放恣、醜陋沒趣味なる者の家庭と比較すれば月艶の相違がある。

資性温厚篤實にして人の世話を能くする仁者である、人の世話をすると云ふことは誰もが好くところであつて而も

實際の場合に遭遇すると却々出来ないものである、亦世話をしても何物か其代償を求める心の起るのは人情で若し世話をして遣つたその人が自分に反く様なことがある場合、腹立たしく思ふの亦人情である。

此點に於いて上山氏の世話振りは徹底して居る、第三者から見るときは、夫れが物好みの様にも見へ、又氏の道樂かの如く思はれる位に能く人の世話する、氏の世話振りは恩を着せる心ではない代償を得んとする心は毛頭ない唯だ人の爲、國の爲め、社會の爲め人間が合見互だと云ふ眞の同情から迸り出づる誠意の發露に外ならぬ。

氏から種々世話を受けた人々は相當に多い氏は禮を云ふて貰ふと云ふ心は毛頭なかつたが不思議にも氏が世話をした人は何れも成功してゐる、成功せぬまでも順調に行つてゐる、然して世話を受けた人達が氏を徳としてゐること又大したものである。

上山勘太郎氏

大日本除蟲粉株式會社々長
和歌山縣有田郡保田村
大阪市西區土佐堀通三

世の人を論ぜんとするもの、往々創業の人物に偏て守成の人を輕視せんとするの風がある。素より艱難刻苦自から其荆棘を拓き、磐錯錯節を排除して新に其業を創むると云ふことは最も至難の事に違ひはない、然れども渠等の境遇は單に現状維持を許さず、進取敢爲の止むなき原動力を以て居る。故に進めば進ると原則もあれば亦艱難汝を玉にするると云ふ諺もある。然るに守成の一方に至りては既に相當の地位に進み如何に非凡なる才能があつても夫れ以前の行程に到底經驗することは出来ぬ。言はゞ前者の原動力に對する惰力であつて最早退歩の境遇に瀕して居る譯である。殊に前者は目的を達すれば非常なる喝采を博し、若し失敗に終るとも敢て已に損する處なく、世人も亦之れを非難するものはない。然るに後者にあつては進むも格別世の賞讃に値へずと雖も一朝退かんか非難攻撃忽ち來而已ならず、祖業を顧み家名を思ひ萬一の蹉跌を慮れず、時に或は意のある處を敢行する能はざる場合もある。

故に古人も創業難きか守成難きか判断が出来ないと云ひ、山崎闇齋の如きは貧賤の家に生れたるものは何より幸福であると言つて居るのも要するに此間の消息の説を説いたものである。

然るに世人が往々守成の人を輕んずる風あると共に、上山勘太郎氏が世界中の幸福を一身に集めたる幸福な人であると一言の下に品し去るものあれば未だ此間の眞理を解せないもの、言と謂ふべきである。

上山勘太郎氏は我が國産業貿易界の大先輩、關西財界の一大權威上山英一郎氏の長男にて明治二十二年九月生、和歌山中學校を経て東京高等商業學校卒業し直ちに外交官に志したるも不幸養父母の喪に會ひ、親族一同の懇望に依り將來華々しき外交官たる意志を翻し、郷里にあつて上山家の家政司り、傍ら實父英一郎氏の片腕となつて産業立國の

爲め、郷土の進歩發展の爲め靈腕を揮ひ實業界に活躍せり。現に大日本除蟲粉株式會社社長、南海水力電氣株式會社、上山殖産株式會社、岸和田煉瓦綿業株式會社、其他各社の重役、大阪商工會議所議員の要職にあり。

上山氏の人格・家庭・讀書

人格は人たるに於いての第一要素である。宛かも國家として、一國として、一市町村として人格を要するが如し。人格なき人は、人にして人にあらず。人格は猶天使の如し、彼れや親むべく狃るべからず、試に人格の高き人と接す期せずして自ら襟を正さざるを得ざるなり、肅然として敬を拂はざるを得ざるなり。

人として人格を造るの要義は讀書の力は平凡の人をして克く向上せしむ、而して向上の意義は人格と相通じ、是の故に讀書は知らず識らずのうちに其の人をして克く人格の人ならしむ。

上山氏は現代稀に見んの讀書子である、其智識の該博にして而かも總合的なる才能の澄澗にして、而かも浮薄ならず、其人物の單調にして而かも無數の趣味に富み、其人格の飽迄偉大にして而かも細心なる、其家庭の春風和氣にして而かも現律的なる皆之れ讀書の智能の煥發展化に外ならず。

英國人的氣質を以て米國人的の事業を遂行せよとは氏の理想？氏が執着力は英人的を表はし、而して其勇往邁進の資は即ち米人的本性を現はしてゐる。

苟くも天下に立つて事を爲さんと欲するものは英人的氣質を以て米人的の事業を爲す。何を苦んでか事の成らざるを

憂ふに足らん哉。氏は能く時代を知る者と謂はざるを得ない。

氏は又友誼に厚く、人の窮に接すの俠氣は其渾身に溢れ、往々自己を顧みざる事あり。氏の居常極めて清楚に而かも克く胸裏萬斛の平和を湛へて神心却て晏知たる所以のものは畢竟するに洋々の希望を其心底に宿せるが故である。

希望は神なり、道なり、苟も一度之れを有す。白刃前に閃き、水火背後に迫るも亦以て恐るべしと爲さず、ア、幸福なる氏は此の希望を有しぬ。汝が希望の前程は汝の希望的光明によりて汝を更に幸福なる運命の大道に導かんとせり、氏も又須く此の大道に向つて馳突すべきなり。

その型は純英國式の紳士である、風采そのものを見る寸分の間がない程すべてが整つてゐる。この風采がそのまま上山勘太郎氏の性格と言つてもよいのである。抱擁力も多分に持ち、人に對しても親護りそのまゝの温容で多くの社員や従業員が神の如くに敬し慈母の如く慕つてゐる、明日の大大阪の財界を背負つて起つ明朗な紳士である。

因に大藏省銀行局普通銀行課長兼検査課長、營繕管財局理事、從四位勳五等上山英三氏が氏の令弟である。

左 納 利 一 氏

和 泉 製 紐 所 主
大 阪 府 貝 塚 町

泉州事業界に稀有の名門と人格崇高とを以て斷然光る左納利一氏とは如何なる人物なりやと、余が屢々質問をうける。余は即座に答へて曰く『左納氏は至誠實行者なり』と應ふるのである。而し確かに氏は至誠の人である。

濃厚篤實紳士の典型である、不言實行の人である、語るよりも手を用ひよとは氏が躬を支配して居る。之れが氏の主義であり、理想である。若くは良師である。父母である。克く言ふ者は未だ必ずしも克く行はずとは氏が對人的要談の一となりてゐる。故に亦氏は名を求めるよりも實を貴ぶ健實な人である。

多くの場合に於いても決して賣名を欲せず、實を尙ぶ風がある。氏は亦全然表裏がない、暗黒がない、極めて光明の大道を辿る人である。氏は常に語つて曰く『至誠なれ』：至誠は最後の勝利者である計りでなく、其行にも至誠を主としてゐる。凡そ人物に尙ぶ所のものは其人格である、人格は人物の生命ではないか、而して其人格は其人物に附隨して如何なる所にも見られるものである。

假令へは其仕事に見られ、家庭に見られ、態度應對に見られるのである。若し之れを仮に銜ふ者ありとするも、そは一時の事で幾何もなく如此の人は馬脚を露出するのである。

偽善的人格の粉飾は宛かもメッキのソレの如く幾日ならずして地金を露はすものである。人格は猶純金の如く常に錆、且つ變色の憂なきのみならず、其風趣自ずから歛すべきものがある。人格は猶金剛石の如く氏は暗にありて尙燦然たる輝きを放つ氏は決して銜はず誇らざるも却つて其天真の流露なる處に靄然として掬すべきものと共に人をして轉た敬慕の念を禁ぜざらしむものがある。

今西與三郎氏

阪神電氣鐵道株式會社々長
大阪市西區本田三番町

關西電鐵界に今西與三郎氏の名は忘却する事は出来ぬ。其人物が業界に稀らしいといはれてゐる。殊に關西電鐵界のうちから尙しも氏を忘却したならば甚だしく殺風景を感じる、手持無沙汰のやうな感じがするでないか。人物は一國に取りての花であるが如く大阪郊外電鐵を飾る上に於いても氏が一つの名花となつて居る。

阪神電鐵は現在郊外電鐵中最大億圓の巨資を抱き、業界の一流會社として羽振を利かすのも勿論先代林三郎氏や島徳藏氏の偉大な功績もあらうが兩氏なき後の同社は依然として斷然業界に輝いてゐるのは確かに専務より社長としての氏の努力が與かつて異大なる力がある。

今西與三郎氏は明治二十年二月生れにて先代林三郎氏養子となり大正十三年家督を相續す、氏の學歴は大阪高等商業學校卒業後更に京都帝國大學法科大學政治科に入り明治四十五年卒業、現在阪神電氣鐵道株式會社々長の外、阪神國道自動車株式會社、杉村倉庫、朝日海上火災保險株式會社、新京阪神土地株式會社、朝鮮無煙炭礦株式會社、四國牛絲株式會社の各重役、大阪三品取引所理事、大阪貿易學校理事の重職にあり。

氏が頭腦頗る明晰なることは大阪財界の社長中でも燦然と光を放つてゐる。非常に謹嚴にして何れかと云へば學究的な紳士で京大法科を出るときは銀時計の榮冠を得、大學や文部省は未來の博士教授に爲すべく氏も又將來學者を以て世に起つべく決心してゐたらしいが時の大學總長が文部省の無謀な彈壓に泣寢した現實的悲哀を眼前に見せつけられた、元來意に勝てる氏が餘りに學者の意氣地のないのにホト／＼嫌氣がさして斷然學者になることを斷念したと傳へられてゐる。

其後實業界に身を投じ山下汽船に入社し其俊敏と鬼才が認められて先輩を抜きトシ／＼拍子に榮進、又榮進を續け將來を約束されたが、大阪商船の懇望に依り同社に轉じたが幾年ならずして養父林三郎氏が愛撫したる阪神電鐵に専務として入社したのである。

阪神電鐵は明治三十二年六月資本金百五拾萬圓を以て創立し春風秋霜三十幾年かの間に今日の如く東洋一の電鐵、資本金壹億圓の巨資を抱き發展したのである。阪神が持つ唯一無二の誇である、世界の商港神戸と東洋一の商工都市大大阪を終始點する事に依つて愈々益々將來性のあることは何んと云ふても否定の出来ない事實である。實に阪神の寶庫は大阪と神戸にあり、更に又阪神の沿線には野球王國甲子園初め各地到る處に名勝舊蹟は散在し、郊外電鐵の生命である都市と都市に始絡起點し、同社の將來有望多事多端である。

吾人は前途實に多望なる阪神に而かも會社の心臓である社長に氏の如き横溢せる霸氣頭腦明晰の新人を社長に得たことは一般株主は勿論我が交通運輸界の爲めにも喜ばしいことである。

氏は人と接して駄辯を弄せず、但し談論興に入れば快辭を揮ふも無益の言は一言半句を弄せず、一言一句必ず責任を持つ所謂言語の價値を重んずる實業界に稀らしい重厚の紳士である。

また氏が炯眼にして機を見るに敏なること遙かに他長を抜いてゐる、その辯舌に於いてこそ多く語らざるもその社交に於いては流石に新人だけあつて貴公子然たる風采と玲瓏玉の如き品性を以て人に接す。尙氏の前途益々多望第二世今西林三郎として關西財界に囑望すべきものある吾人は茲に喋々するを要せず。

先代林三郎氏が實業界に

貽たる偉大なる功績

林三郎氏は愛媛縣北宇和郡好藤村に嘉永五年二月五日生れ、明治十五年大阪同盟汽船取扱會社を設立し推されて社長となり、明治十七年大阪商船株式會社の創立に際し發起誘導委員に選ばれ東奔西走努力せり、或は支配人として多大の功を貽す。現に同社は東洋海運界の覇權を握り、斯界に飛雄せるも實に氏に負ふところ大なるものあり、明治二十三年宇和島銀行の取締役、同二十四年大阪毛糸、伊豫物産の兩社を起し、同二十五年山陽鐵道の支配人、同年朝日紡績を創立、又大阪商業會議所創立發起人、晩年に到りては阪神電鐵、大阪港土地の社長、三品取引所理事長、明治製煉、和歌山電氣、宇和島輕便、松浦炭礦、大阪瓦斯、東洋木材防腐、中央セメント、日本フランネル、宇和島銀行の各重役等に歴任し我が實業界に貽せる功績は實に偉大である。

岡本市治郎氏

新興の意氣に燃ゆる
貝塚町長

凡そ國運の隆盛と民生の幸福とは地方自治體の發達進歩に俟つところ甚大なるものがある。即ち地方自治體は國家の基礎なると共に、また國民生存の根據となるものであるから、その經營は最も意を用ふべき所である。

而して之れが發達を圖らんとするには、之を指導すべき首腦者にその人を得なければならぬ。然るに我國今日の状態を見るに自治體の首腦者が一般に向下しつゝある傾向があるのは國家の爲めには甚だ憂ふべき現象ではないか。

一國の繁榮は一市町村の繁榮に始まり、一市町村の繁榮は之を統轄する市町村長の人物識見、力量如何に依るものである。

斯の如き場合に當り南海沿線に工業都市建設の殿堂に向つて募進してゐる貝塚町、而してグレート貝塚市建設の第一線に起ちて雄々しく活躍してゐるのは徳望を以て地方に普きたる現町長岡本市治郎氏である。

氏は元來實業家出身にして、其資性温厚にして謹直君子の風があるが、他面又剛毅な一面も伺はれる。着實を以て有名な町長であるが聰明にして果斷な所がある。問題に當つても技葉末節に惑はされず、大局に着眼して善處するの機敏がある。

協調の精神に富み、紊りに人と争ふことを好まず、飽くまでも平和裡に事を收めんとするが、時としては斷乎として其主張を貫徹する勇氣を失はない、吾人は斯る紳士の典型と言ふべき良き町長を得てゐることは貝塚町民諸君の爲めに慶賀すべきものである。

溝淵春次氏

大阪府會議員
政友會大阪支部幹事長
辯護士

政治家に缺く可からざるものは雄辯である。恰も戦場に於いて武器は兵士の生命なるが如く、雄辯は政治家にとつて唯一の武器である。縦へ識見が高く抱負があり、主義主張がありとするも、此の武器を有せずんば到底政治家として成功する譯には行かぬ、況んや主義もなく主張もなきものに於いてをや。

然るに世には雄辯家少なく、又主義の堅備にして且つ偉大なる抱負を有するものなく是れ政治家として成功するも甚だ寥々たる所以である。今ま大大阪府に於いて政治家に志せるものを見るに又此の例に漏れず、試みに府制布かれて幾十年、以來府會議員幾百人、府政経倫の天才を抱き府會議場に府百年の大計、府民の福利増進の爲めに侃諤の辯を弄したるもの果して幾人がある、多くは四年間無言の行を修し府民より沈黙の勇士の有難度いニツクネームをつけられたもの多く、甚だしきに到つては其の存在すら認められたるもの少くなし、また心細きことならずや。

之れ蓋し悉く府會議員として識見抱負を有せざりし結果にはあらざるべく、其唯一の武器たる辯論に長ぜざりし致す處である。

而も府會議員の人物の向下したる今日の如く甚だしきはない。いま大阪府の府會議員なるものを一瞥すれば、眞に府政を料理すべき抱負あり、才能あり、人格ある人物が果して幾人あるであらうか、されば府財政教育、勸業等の大問題に對しては一定の主義政策もなく、徒らに府當局の施設に甘んじて其缺點を指摘するの明はない、殊にまた見識のないことは夥多しく府廳の役人にさへお辭儀の何百遍で若しも知事の官舎で一餐の饗應でも受けることあれば之れ無上の光榮として恐悦がる風である。

従つて當局には侮蔑され、國家の根底たる自治團體の健全なる發達杯は思ひもよらず、彼等に唯だ肩書の虚榮に渾身の浮身を棄して、選挙民に威張り散らすだけが關の山である。

ア、府民三百萬人の決議機關として斯る醜輩を代表せしめてゐるのは洵に心細き次第と云はねばならぬ。此の秋に當りて高遠なる理想を抱き、堅實なる主義主張に由つて進退し、常に國家公共の福祉に勇奮邁進、穩健着實なる溝淵春次氏を得たることは實に我國の精華と欣ばずば非らず。

我が溝淵春次氏は關大を優秀なる成績を以て出でたり、學生時代より萬人敬慕して止まざる天下の雄辯家にして府會議員中の花形である。

氏は府政上に遠大なる抱負、高遠なる理想を有し大大阪府下に於ける若手政治家として全く府民より絶大なる信頼を受けつゝあり。

氏は純眞なる青年政治家だけあつて常に純眞なる主張、堂々たる言論は實に府會の權威となり、大政友會大阪支部黨員中氏の右に出づる者果して幾人あるか。宜なる哉、多士濟々たる政友會に在つて支部幹事長の氏は居然としてその大なしてゐる、近き將來には日比谷原頭に於いて國民の福祉増進を絶叫する人である。

而して辯護士としては法則に精通し實地に造詣殊に深し。氏は大阪の紳士の花形株にして、辯護士として既に斯界の英物たり。

然して氏は性温和にして且恬憺寡慾、人に接して苟しくも城府を築かず、洒落水の清きが如し、依つて亦訴訟依頼

者は其の門に市をなせり。而も氏の至誠は識別誠に速かにして、其任託を果すに於いても至らざるところなし。氏が法律上の智識は飽迄に新派に囑し、性の磊落にして、膽の宥徹たる且つ朝發暮改の法律細條に向つても瞥見默讀亦能く胸臆に藏めずと言ふことなし。また一度法廷に立ちて辯護抗論を逞しうするや恰も論戰堂々として風發雨聲の感あり。是れに於いて乎、衆望を一身に錘めて明らかに諸辯護士を壓するなり。

溝淵氏は誠に刑事被告の辯護の技量に於いても堪能なり、而かも殊更に堪能とするところは民事訴訟に有るが如し蓋し氏の論理明晰、據證の嶄新なる、而して恬淡なるその性が奇智頓才に富める正しく民事に於いて適當なる學理的進展を見せる者乎。

氏の風韻は即ち以て歡迎するに堪えたるどころなり。尙氏の趣味は讀書にして品行方正當世紳士中稀に見るの好紳士である。

西田貞亮師

西方寺住職
岸和田市北町

近代人は最早地獄極樂を説いては満足せぬ。今や宗教を信仰せんが爲に進んで研究するものは却つて本職の宗教家以上の智識を持つて居る、隨て昔風に無智文盲の善男善女を集めて單に感情的にお釋迦様に金色の御光が映ずるとか西方十萬億土の處に御座る杯と言つて居ては最早隨喜渴仰するものでない。

然らば何うしても今後は佛教を根本的に研究して哲學を基礎として専ら系統的理論の上から布行しなければならぬ。従つて宗教家其人も哲學上の研究が必要であること云までもない、而して之れは偏に人格崇高、眞に愛山護法の大精神に生きる宗教家に俟たなければならぬ。然るに我邦現在の宗教家なるものは最も割の悪い職業である。

故に名利と衒氣に満ちて居る新進有爲の人は自ら之れに任ずることを好まない、之れ我邦の宗教界が日々に寂寞を感ぜしめて居る所以である。

我が岸和田市名刹西方寺住職西田貞亮師は獨り之れが天使となり、其使命を全うして宗教界の腐敗を郭清せんとする自覺を以て起つた高僧であるから最も吾人が尊敬すべく又將來を嚆目してゐる所以である。師が時宜に適する布教傳道に努め人心を教撫する一面古くから西方寺日曜學校を開校し人間の天使である子供の教育に全力を注ぎ、更にローマ字普及に徹底的努力し、萬々崇敬して止まず、誰か師の其先見卓識に敬服せざるものぞ。其他名利を趁はず聞達を求めず、身を挺して盡忠護法の大精神を發揮し事蹟數ふるに遑あらず。

師は天資仁厚にして頗る卓識あり、而して意志の勇敢、其高壇に上りて法を説くや眼光閃々として人を射言議肅然として亂れず、聽者皆襟を正しゆうす。而かも佳境に入るや感情雄辯風を生じ氣堂に溢るの概あり。

次田 虎雄 氏

大 阪 市 會 議 員

大 阪 市 浪 速 區 立 葉 町

政治家に尊ぶ所のものは内に高遠なる政治上の理想を有し、外に之れが實行に努むると共に主義主張に由つて終始し、而して其志操の堅固不拔なるところにある。

斯くして始めて眞の政治家と稱することを得べし。蓋し政治家に主義主張なきものは恰も船に羅針盤なきが如くに何等の用を爲さざるのみならず、寧ろ國家社會に害毒を流すものと云はねばならぬ。政界の腐敗、國政の廢亂は總て此種のデモ政治家が世に多い結果である。

而かも政治家と稱して國政を安定し民衆を指導せんとするに至りては危険之より甚だしいことはない。然り我國政治家と稱するものが滔々として皆此の有様である。されば憲政實施以來既に幾星霜政界は腐敗を重ねて互に利を射るに吸々たるが如き、少しも怪しむるに足らぬ。

此の時に當りて高遠なる理想を抱き、堅實牢固なる主義主張に由つて進退し常に國家公共の福祉に勇奮邁進、穩健着實たる大阪市會議員次田虎雄氏を得たることは實に大阪市政界の精華と欣ばずば非らず。

次田氏の政治的の發露としては當然經なければならぬ階段を順序よく、而かも常に無難にて其他區内の名譽は何に一つとして缺かさず經て來て居る。往訪の記者を迎へていと快く引見された氏の時の民衆的態度は流石大阪市民に絶對的信認され彼等より神の如く尊敬されてゐる近代人の要求する民衆的政治家だナアと驚かざるを得なかつた。その温容な風貌また人を魅するところあり、即ち徳を以て廉潔な性情を自然に發揮するやうに思はれる。

多辯を弄せず、一言一句悉く市民の福利増進、多事多端な市政打開の實に花も實もある話のみ、時に産業を論ずれ

ば、又人生の處世の道を説き、或は青年鞭撻の快氣焰を聞く、その氣魄の稟々とした處は或る意味に於いて古武士的であるとも云へる。

所謂花も實もある市會議員と謂へば恐らくは此の次田氏の如きを指すのだらうと思ふ。氏は市會議員としての任を全うし、市區にありては斯くの如き頗る温情掬すべき應接と溢るゝ人間味と而して私事公事に拘らず、よく人の世話をせられるから誰もが慈父の如き感を以て畏服されてゐる、兎に角温情主義にして敵も味方も求めない、只幸にして自己の誠意と徳望が對者に迎合するならばそれで可なりといふ内剛外柔、淡快な性情は現代政治家に稀れに見る奥床しい點である。

元來政治家に威力ばかりでなく、魅力もまた必要である。斯の英雄豪傑が婦女子に對して一種の魅力を持つのは市政治家の生命である。

魅力といふといかにも神秘的に聞えるが、それは要するに市民間に「充たされないものが充たされるといふ望み」を抱かせることである。

次田氏は確かに市民間に魅力を持たせてゐる、それは恰も戀する男女が神秘的魅力を持つてゐるやうに戀愛至上のものは男女互に正しく相識することだといふと同様に、最上の市政は市民自身が自分達に住み心地良き都市を造つて呉れる市會議員に魅力を持つ。次田氏の強味はそこだ、氏の場合は神秘的の魅力でなくして合理的認識に基くものである。

市民と氏とは逆上したる變態的戀愛でなく、愛すべき所以を自覺して、戀する市民と市會議員となつてゐる。是れが最も進歩した東洋の商工都市大阪市政であり、市民と議員との戀愛である。

氏は一度劃策したる事は飽迄も遂行し、中途に於いて如何なる障害があるとも斷じて行へば鬼神も避けるといふ、いとも頼母敷いきくした正論主義飽迄敢行せねば止まぬ人である。而かも政治道德が此の唯一の金看板して如何なる場合にも斷じて他人に迷惑を懸けぬといふ嚴然たる信條を有し、亦至つて平和な人にて極めて人間味豊かに人を愛する美徳は判然とし、而かも自然に具はる氣品崇高なる人格を有し、氏の温容に接せんか、駭蕩として春風に吹かるゝ想ひがある。



大矢寧明氏

阪神國道自動車株式會社
常務取締役
大阪市東區寺山町

當今關西のバス界で先づ手腕家なるものを求むる場合には名望隆々たる社長級に於いてするよりも寧ろ常務、専務級の人々にあつて其多くを得らるものである。

社長級の人々等は所謂名望で立つて居る人で經濟上の勢力と社交上の信任とこの二點を以て兎も角も一社もしくは數社の管理者として常務、専務の人々を操縦して居るのである、けれども夫れが決して能くやり切る、手腕の力でなく其勢力を過半以上は彼等に追隨し、若しくは彼の下にあつて義務を擔任せる常務、専務の人々の術中に因るものである、だから單に自動車交通運輸界の手腕家といふ場合になるに最も多く實務に當つて居る常務、専務の側に於いて求めねばならぬ事になる。

之れ等の人々の級に於いて巾を利かして居るもの阪神國道自動車株式會社常務取締役大阪乗合自動車株式會社取締役、大矢寧明氏を挙げねばなるまい。

氏は實際素養もあり資力もありして隱然重きをなしてゐる。氏の業界の其潜勢力は大したもので老成な社長級は差し措いて實際の勢力と云ふたら實に大なるものである。かくして氏は關西自動車交通運輸界に於いて實務的執力圏を三分して完全に其の一を保つ巨星である。

大矢氏の力量と手腕を信じて居る、社長や株主は殆ど社務を任せてゐる、一切の權限といはないが大抵の事は氏が片付けてゐる。氏は社長や株主の意氣に感じてゐる、人生意氣を尙ぶ男子亦知己に感ず社長や株主は自己を信認してくれるといふことは大なる知己である。

此知己に對して酬ゆる所以の道は精力の傾倒にある、粉骨碎身にある、滿腔の誠意を捧げて社務に當るにある。

氏は益々知己の感を深めて行く縦し身を千々に砕くとも辭するところでない、阪國バスが生れるや各方面から非難攻撃を浴せられ一時は可成の苦境にあつたが泉州人らしい興奮的、大矢氏獨特の負けず魂の弾力は一層の猛火となつて氏を發奮せしめた。

氏は兩身の勢力を傾けて社務の刷新を謀ると同時に他面に於いては全渾の智力を振起して幾多の情弊を剪除し、群がる商敵を完全に降服せしめた其の凄腕には世人は驚嘆してゐる。氏は確に意氣の人である、渾身總て之れ意氣を以て成れる人である、故に氏は如何なる場合に於いても亦如何なる人に接するも氏は何處までもエキस्पレションなり而して氏のエキस्पレションは物を呑み、亦時には亦事業迄呑んでかゝるなり、豪膽、氏の勇氣、而して氏の事業に對する執着力は全く氏のエナヂーは此の意氣の發動し來れる結果にして而して氏の意氣は理性と調合し自信力を配台す。氏は此最も鋭敏なる原動力によつて先づ其發揮點を得たるものにして斯くして氏は更に強烈なる執着力主義を以て終始する人である。

氏には既に此の執着力あり假令如何なる難問題に際會するもドコ迄も其進行を續け貫徹を期する快傑である。而して氏は誠に任侠に富んだ紳士らしい紳士である、今ま關西で自動車問題の紛擾には大抵氏が顔を出して始末をつけ居る。如何に紛擾した問題でも大矢氏が來たと云へば一切の理窟を抜きにして丸く納まる。別にした大學者でない只阪國バスの常務をやつてゐるだけで去りとて他の資本家のやうに黄金をバラ撒いて金の威光で對手を買収すると云ふ

譯でなく社會の爲めなら身を粉にしても厭はぬと云ふ俗臭紛々たる資本家に稀らしい熱と正義を多分に持ち公共利公益の爲めには火の中水の中も辭せないと云ふ只此の誠意を唯一の武器として何事も支配してゐる。

而して氏は高朗清明の紳士なるのみと觀て世人は唯平和の一紳士の如く思へどもかゝるは深く大矢氏なるを知らぬものゝ言である。

氏の兩眼は異光ありて人を射るものあり氏が微笑を漏らして靜かに將來のガソリン文明を語る言葉の語句の間には儼として秋霜の如く清く且つ烈なるものあるにあらずや。故に表に溫厚なる一君子たる氏は其眞骨髓に於いては無比の精英である。

氏は大阪府泉南郡貝塚町出身にて明治二十年一月に生る。

中山定次郎氏

中山織布工場主
泉北郡鳳町

規模の大、營業の盛、泉州の事業界に嶄無一頭地を抜き、綿布界の霸王たるは今更嗚々を要せず、其鬱乎たる事業圏は實に關西織布界の白眉にして、其經營振りは周到綿密を極め、従業員優待に關する遺憾なき設備と寛容鄭重なる社員優遇方法とは今や首尾脈絡完全し、宛然一大掌踵の如く起倒盛衰定まりなき事業界に於て駸々乎々一糸亂れず進展の武歩を示しつゝある。

業績に到りては眞に稀視の偉觀にして、徒らに巨資本を擁し、膨大なる規模を有し、而かも經營に困憊し左支右吾して僅かに事業の命脈を保持するに汲々たるものに比し全く其の選を異にし、關西織布を語るものをして夙に代表的會社たる稱讚と崇敬とを拂はしむるもの又宜なりと謂ふべし。

而し同社の今日あるは實に社主中山定次郎氏が一意一業主義を奉じ、全力を其經營に傾け、苦心案劃向上發展の理想に邁進し、社員初め従業員諸氏亦協心戮力社業の興廢を以つて一身の榮辱とし、努力を傾注し延つて勞働者の發奮を喚びたる結果に外ならぬ。

而かも同社の方針たる隨時中山社主が發表せる意見抱負に依りて窺知せらるゝが如く切に斯界の泰斗たるを斯するに在りて、其今日の成果は中山社主以下従業員に到る幾千人が創立以來粒々辛苦の結晶たる亦能く世の知る處である然れば同社關係者諸氏の決心覺悟は所謂彼の網利賣名の實業家と異り眞に懸命を極め、曾つて宣明せるが如く同社事業を以て生命とし、専心一意此の一事業に全力を傾注し粉骨碎身社業の發展經營設備の向上を念とし、一路此の綱程を辿れるのみ他を顧みず、縦つて同社營業成績が又他會社他事業の容易に企及し得可からざる諸多の優點を有し

駸々乎々日に月に隆盛を重ね、着々社業擴張の餘裕を示し、首尾一貫規模の充實に力め、製品の聲價益々高く市場に於ける隆々たる信望を蒐め得るもの全く其卓越せる經營の結果たりと謂ふべく、終始一貫巨然として眞に王者の歩みと謂ふ可く、なほ海の彼方アフリカへの進出等同社がいまや全く業界の覇者に非らずして王者を以て稱せらるるものにその所以たり。

現在の同社は本社を大阪府下泉北郡鶴田村に置き、分工場は大阪府下泉南郡八木村大町、同西大路、同山直町、同泉北郡鳳町の五ヶ所に設置され、製品は主として大巾に注ぎ、一部は人絹物をも現はして業界に重きを成してゐる。

中山織布工場の其基礎の堅實にして施設經營の進歩的その責任觀の強いことは他一流會社に比するも敢て遜色なしと稱せられてゐる。蓋し成功は偶然に來らず事業は必ず人物に俟たざるべからずとせば、是亦その經營者中に優良なる人物の存在するに因るものたることを想像するに足るべく、即ち社主中山定次郎氏の手腕識見が今ま業界の群豪を抜きつゝあることは既に世の定評である。

工場の繁榮は繋つて従業員の骨を惜しむか否かにある、従業員は工場の至寶であるから我子よりも大切であるとは中山氏の意見でその待遇は至り悉くせりであるから従業員も又氏を思ふ事一方ならない、之れが毎日々々の工程に大影響を及ぼすは勿論である。

中山織布工場の今日の隆盛を來たしたものは一に中山氏力にありとは云へ一従業員に至る迄萬死且つ辭せざる底の奮闘も亦大に興つて力あるものである。社主の温情主義の感化を受けて上下能く一致し親睦して業務の發展、優良品

製織、販路の向上に努力しつゝあるかゞ推測される。

中山氏は豪放にして膽は斗の如く、智は神の如く、而かも義氣と同情に富み、總て他人の爲めに謀つて自ら快とす若し氏の手腕を代て普通の商人の如く私利私福を念として事業に従事してゐたなれば、今頃は莫大なる資産を造り上げてゐることは必然である。

けれども氏は決して私利私福を圖ることなく徹頭徹尾、社會公共と人を造ることに全力を注いでゐたのである。俗臭粉々たる泉州事業界に斯かる人間味豊かな高朗清明の若き事業家を得たることは我が泉州の誇りであると云ひたいのである。



村垣彦次郎氏

丸正デパート支配人
和歌山市本町二丁目

紀州の首都和歌山一のデパートといはれる丸正の營業の樞軸を握るものは以て天下の流行を沙汰し、以て國家の運命を動かすのである。蓋し人間生存の主要條件たる衣食住の一角たる衣の領分は、之れを富の上、流行の上、慾望の上、何れよりいふもその時代の力の多くを支配する、實に容易ならず。況んや其の之れに加ふるに住居の事を以てするや、而して丸正の衣の外、食住のことまでも支配するものなり。

村垣彦次郎氏は丸正の支配人である、之れほど華やかなる地位にある人、元より人才なる可し。去れども人才にも其地位にあるの人、幾多の系統あり、幾多の色別あるものなれば吾人が問はんと欲する所のもは其如何なる種類の人才なるか。丸正の營業の仕方と云ふのは米國風といふ可きものゝ如し、其デパートメントストアなるものは米國に其源を發し、諸國に行はる、これ世界的に云へば、世界を縮寫し、之れ國家的に云へば、國家を縮寫し、之れを都市的に云へば都市を縮寫す。

丸正と云ふ一つの建築物の中に入れば各自が需むる一物を中心として一切の需要具一時に集められ、實に便利重寶である。故に人は時間を節し、流行を知り、嗜好を満足し、全館は華容を以て溢る。動物の性明を索め、輝を慕ふ、繁華に酔ふ、人も亦動物である、其輝ける場所に向ひて市を感じるは天性である。

丸正の方針は此處に取りあるか如何は知らざれども、盛んなる經營振りは自然に人の性と合してゐる。然れども天下流行の大百貨たるものは流行の合體を支配するの利潤の大なるものであると共に人の生をも知ること、利を射ることのみを知ると共に人の生をも知ることを要す。利を射ることのみを知りて害の起るを知らざるまきは性を制

するも、生を制せざるに至る。こゝに於いてか技業を剪ることを知りて本を養ふを知らざるの愚に終るのみ。

吾人は村垣氏の人物論に入るに當りて此の如く先づ丸正たるものゝ見識を問ふ。丸正は日本の流行界を沙汰するものなる以上、丸正は自ら日本の生活の標準點を調査して、其流行の限度を知り、又日本國民性の何たるをも知りて日本人といふも、分限に應じて、其流行を限ることも知らざる可からず、若し然らざるときは往々にして一國の風教を害ふに至るのである。

村垣氏の人才として深淺が何の邊にあるかは如此き堂々たる立場よりして試験せましく思はるゝも、氏は又氏として天下の百貨店を支配するの抱負と識見を有し、吾人の加言を俟たざるものなる可し。

丸正松尾社長は穎敏なる人才である、其人才を集めてその英を抜き秀を鍾めて、以て美事に其經營を進め來りたるは世の人の知るところである。

而して村垣氏は松尾社長が其代表者として最も深く信頼する人なりと云ふことである。最も巧みなる商人は最も能く人氣を取る人である、最も良く人氣を取る事は、先づ自我を没却して時代の輝きと明とを集めて時代に供することである、是れ最もよく時代の大勢に服従し、且つ大勢を導くものである、近代の成功者の繁昌の秘訣は皆この間に存す。

乍去天下の百貨店たる見識の上よりいふときは大勢の赴くに任せてこれを利用すると共に之れを制するといふ自己明と力とを加はふを要し、然れども這般のことはステータツァンの本分にして商人の知る所にあらずと云はゞ、夫れ

も商人として上より云ひて至當なれども、されど一國の流行の魁、大百貨店たるものは永久を大切にして木の枯れず風教の害はれざる範圍に限り置きて見識を立て、經營するといふことも亦大きな店の任務である。

斯かる經營法にして妙を得ば更に經營の至上なるものである。不人氣を買ふも平然之れを眼下に見下ろし、不人氣の品より順に廻らすだけの力あるときは阿諛御世辭の商人にあらずして、命令權のある商人となるものである。丸正にも少しくこれ程の見識がありたきものである。

村垣氏の頭腦は堅緻にして滴れも漏らさず、人情頗る厚し、此の簡單なる言葉の中よりして村垣氏の人間の何たるを批評せんか、氏は經營家として先づ整理に長ずるが故に仕事が紊れずして武歩に整ひてその打算歴々として明確なるを告ぐるに至る。「言の明晰、氣の鋭なる元氣ありて果斷の勇あるを知る、下を厚く遇する心濶くして人の上に長たる力量を與ふるを見る。」之れ丸正の支配人として申分なき人物なりと云ふべし。

人間の中も有り、勤勉家にして時務を達察する明あり。

川口義宏氏

和歌山紡織株式會社々長
大阪市住吉區住吉町

川口義宏氏は關西の富豪である、而して和歌山紡織株式會社々社、日本海上保險株式會社取締役である。氏は社長や會社の重役と言ふ肩書は名譽の表章なりと思惟する榮冠よりも人物其ものには一層大なる輝きが潜んで居る。

蓋し富豪や會社の社長の如き、必ずしも氏一人の占有物にあらずして他に幾等も其類がある。況んや富そのものは必ずしも名譽の源泉なりと限つたものにあらず、反つて之が爲めに人生の意義を没却して顧みぬ富豪も多い世の中である。大資本の會社社長も亦時に天下嘲罵の標的たることがあるではないか、されば富豪たり、また社長たることが必ずしも其人物を褒貶する標準とはならぬ、唯だ富豪にして富豪たるの本分を解し、社長にして社長の職責を辱かじめぬといふ者に於いて始めて其人物を稱すべきである。然れども富豪にして富豪の本分を盡し、社長にして社長の職責を全ふすると言ふことは固より當然のことで、之を以て特に其人物を稱揚するには足らぬ。而かも此の當然のことを全ふするものが甚だ尠きを思へば、實際世の中に人物の少なきことを知るべく、隨つて其當然のことでも之れを全ふするものは偉い人間と謂はねばならぬ、況んやそれ以上のことを爲すものに於いてをや。

一體我國の人は富豪になると人間は總て凡化するやうな傾向がある、是れ蓋し富豪なるものは悉ゆる物質的の慾望を充たし得る地位にあるを以て自ら安逸に耽り、遊惰の民となるか、或は其富の擁護に専心し愈々益々慾望を増大にして自己の營利のみに汲々として殆んど他を顧るの餘裕を有するものなく、富豪の本分とか社會公共の爲めなどと言ふことは其念頭に起らぬのである、隨つて益々凡化する而已で富豪に人物なしと言ふは洵に所以なきに非ずである。試みに今日世の幾多の富豪に就いて觀るに其家門の内には黄金の光りは放つてあるも富豪其者の人物には毫も光り

はない、然るに世人の多くは黄金の光りを見て直ちに富豪者たる人物の光りと爲すやうであるが是れ誤謬の甚だしきものである。即ち今日の富門豪家と稱せらるゝ中より黄金の光りを除き去つたなれば、跡は即ち暗黒にしてゴム人形同様である、蓋し富門豪家始めより英才生れざるに非ざるも、黄金の權勢に眩惑し爲めに非常なる英才非凡なる傑士に非らずんば、其向上を害し進歩を阻止せられ、其人物をして大ならしむることが出来ぬ結果である。

故に若し富豪にして其有する富に眩酔せず、其人物を向上ならしむると共に自ら放つ其身の光りが黄金の光りに打勝つと言ふ人物があれば夫れは非常なる英才、非凡なる人物であることを思はねばならぬ。

いま川口義宏氏を觀るに、氏が富豪にしての地位は固より紀州に於いては大なるもので實業家として亦大である。けれども氏は決して富そのものをば左様に有難いものと思つて居らぬ。唯だ我家族制度の上より一家の家長として亦父祖に對し子孫に對する義務として其富、財産を理むることに怠らぬと同時に氏の頭にはヨリ一層國家社會と言ふ觀念が充溢して居る。隨て世の富豪が或は無意義な生活をなし、或は唯だ私利私慾に汲々として殆ど他を顧みるものなき時に當り、氏は國家を思ひ社會のことを考へ、紀州産業の振興と郷土和歌山をヨリよき大和歌山建設の高遠なる理想を辿つて一面には思想家ともなり、又實行家ともなつて其人物は絶えず向上して止まぬと言ふが如き、氏は決して尋常一様の人物でないと云ふことが解るであらう。即ち其人物は氏の財産よりも遙かに以上であることが判る。尙ヨリ一層切實且つ具体的に氏の人物に就て評論するの自由を得させよ。

個人としての川口氏 物に利弊の伴ふが如く、人には亦長所もあらば短所もある、這は如何に英雄豪傑

でも又は大人物でも到底免れぬ處である。いま川口氏を観るに氏は頗る長所に富んでゐる、加之其手には大なる富を提げて居るから些々たる缺點の如きは縦へ之ありとするも蔽はれて人の注目を惹くに足らぬやうである、そこで氏に親しむもの氏を試する言を聞くに唯だ氏は偉いと言ふ何が故に偉いかと問へば氏は富豪なるを以て偉いと言ふに歸するやうであるが、之れでは毫も偉いと言ふ理由になつて居らぬ。

常眼凡腦を以て到底人物が判るものではない、余を以て觀るに氏は頗る民衆的の人物で人々隔壁を設くるやうなことはない、而して氏は最も自信力の強き人物である。随つて常に無遠慮に自己の意見を率直に發表して憚らぬと共に又之を行はんとするに當り、少しも掛け引きがない、掛引きのない處、時に或は露骨に見え、亦無遠慮にも見へることがある。故に表面のみを見るものは或は誤解することがあるかも知れぬが、併し之れを誤解するのは見るもの、眼識がないからである。

氏は實に氣宇廣濶なる人物にして世俗の少年には餘り躡踏せない、而して成すことがすべて直情經行で少しも飾ると言ふことがなく頗る自然的である。

川口氏の略歴 川口氏は和歌山縣の名素封家川口保左衛門の長男にして明治十二年四月に生る、明治三十七年東京高等商業學校を優秀なる成績を以て卒業せり其後二回に亘つて歐米に外遊し歸朝後は幾多の會社の要職に有り、事業界に重きを成し、現に和歌山紡織株式會社々長、日本海上保險株式會社取締役であり、前大阪工商會社取締役たり其他の各種會社の重役は實に枚舉に遑まらず。

池澤原次郎氏

南海鐵道株式會社營業部長
泉北郡高石町

池澤原次郎氏は大政治家でもない、大學者でもない、大實業家でもない、そうかと云つて大哲學者でもなければ大宗教家でもない、氏は唯だ南海電燈の一營業部長に過ぎないのである、併し氏の名は嘖然として天下に鳴り而して氏の前には多くの政治家や、實業家や新聞記者は勿論多くの社員や従業員が恰かも主に對する飼犬の如く何れも頓首再拜して居る、氏は果して如何なる人物であらう乎。

氏は非常に人類愛の豊かな人である、人類愛……それはなんといいふ美しい、そうして又なんといいふ願はしい言葉であらう、人間のうち誰が自ら好んでこの言葉を否定しようとするものがあらう。私達は少なくともこの麗はしい言葉を否定するもの、あることを信ずる事はできないにも拘らず人類相愛の眞實性を無視しゆく多くの非人類愛の存在をマザ／＼見せつけられてゐる。

私達はそのことに直面したとき深刻な悲しみ、恐怖、かつ戦慄を感ずる、私達は永い間人類相愛の根本正義觀念を社會人に絶叫し續けて來た、けれども多くの人々は小我に因はれ自我巧心に墮し人類愛の理想郷に歩み近づかうとしない、却つてその前途を阻み各自が無意識的にも妨害してゐる、その結果しば／＼人類愛と相容れざる惱みをつけ繰返してゐるなんと淺ましい人間社會相である。

私達はそうした社會人深酷な人類愛の徹底意識、人間本然に覺醒して貰はねばならぬ、そうして自からの姿、心を玲瓏たる鏡に映し凝視して欲しいものである。私達は日夜人類愛の美しい言葉をそのまゝ現實化すべく焦慮してゐるものである。

池澤原次郎氏は眞に心から人類愛の爲めに血を燃やしつゝある實業界の仁者である、眞に氏は多くの部下に向つて人類愛を根本正義觀念として近代的の言葉で云へばサービス第一主義も結局愛より出發したものである、氏の愛を根底として經營してゐるのであるから需要家より常に感謝と感激を以て迎へられてゐるから營業成績がグ／＼上つて同社始まつて以來の増收を示してゐる。

要するに大政治家でも大學者でもなく大實業家でもないのに天下に名を成し多くの人に敬せられる所以は蓋し氏の徹底したる人類愛にあるのだ。昭和二年七月十二日突發したる同社開業以來未曾有の勞働爭議は同社の歴史の上から見るなれば實に特筆大書すべき大問題であつた。此の爭議當時の社長は渡邊千代三郎氏、専務は前社長の岡川意一氏であつた、爭議解決の第一線に起つて圓兩解決に努力したのが當時庶務課長であつた池澤氏である。

南海の爭議は天下の三大爭議の一に數へられた位だから天下注視の的となつてゐたその成行如何に依つては郊外電鐵は申すに及ばず、市電にも波及せんとしてゐた、故に南海の解決如何と手に汗を握つて凝と見結めてゐたが案外すらくと滞なく解決し而かも極めて少數の犠牲者に止めたことが爭議團は勿論全勞働團體から萬雷の拍手を以て感謝された、さしも大きな爭議がすらくと解決したが何にが解決させたのか、それは云ふまでもなく池澤氏の人類相愛の大精神であつた。

しかしこう云へば如何にも氏が勞働者のみの味方であつて資本家の利益が顧慮されてゐないやうに考へさせられるがそうでない、最後に爭議團から今後南海に爭議を起さない云ふ誓書と同志會を解散させたことは叫らかに會社の

利益であり大勝利である。

氏のこの大膽不敵の解決には天下の資本家は等しく感嘆して止まなかつた、氏のこの解決に依て以來南海には勞資協調の精神が充満し今日は勿論茲十年や二十年は同社には爭議は斷じて起らないであらう、現在同社は和氣霽然として勞資協調し平和の波が漂ふてゐるのも全く池澤氏の人格と人類愛と社會正義觀念と一身を犠牲にして爭議を解決した賜である。氏が確かに人間味豊かである、その血も純、涙も温かく人生世路の眞味をハッキリと知つてゐる。

温平なる風采、曙星の如き明眸は氏の慈悲を語つてゐる、何時も柔和な態度で客を喜び行雲流水、少しも我といふものを留めない笑話歡語の間にその日を送つてゐる。

何を話しても能く事理主態に通じ人の面倒も見えて遣り人情にも厚く勇氣もある。而かも明晰な頭腦、寛宏の度量も俊材逸材である、氏の徳性は眞に天稟で將たるの資質を有してゐる、恁んな人には不老長壽薬でも薦めて永久南海の模範としたい。

而して氏が非常な達識能文にしてその流暢の文、清新の想、才華煥發して萬人の胸をそよつてゐる。

高津慶次郎氏

攝陽商船株式會社
庶務課長

從來我國の惡習慣では兎も角事務家を低く見てゐる風習がある。其社の係長若しくは課長が何か社長の下に在りて機械的に命令を傳へる木偶の如く見たのである、併し歐米諸國の良習慣では此の課長が最も重要な地位に居るので、會社の信用は一に此の庶務課長に其人を得たと否とに存するのである。實際は名望隆々たる社長級に於いてするよりも寧ろ庶務課長その人にあつて其多くを得らるゝのである。社長は所謂金と社交上に於いてのみであつて事實人格力量手腕を以てゐるのは社長以下の人々に在り。會つて海運界に於いて實際手腕家として隆々たる信望と力量を有し現在では斯界の大先輩として斷然光るのは我が高津慶次郎氏である。氏は攝陽商船本社に入社以來殆んど人生の過半を同社の爲めに捧げて來たのである。實に氏が會社を思ふ至誠、而して同社が氏を愛する全幅の至字は兩に相感應して勢ひ膠漆たらざるを得ない、氏は亦此の爲めに欲する所を與へんとするのは決して偶然でない、氏が極めて誠忠、極めて眞面目に會社大事と其天職に對して至誠一心を以て仕へ來りたと云ふに至りては頗る多とせざるを得ない、更に又之れを社會風教上より見し氏が社に捧げる熱誠は如何に多くの社員船員を感化したることよ、倘し貞女婦烈女義僕の徳を表彰する國家の意思が果して那邊にあるかを知るもの氏も亦甚だしく有徳の士とせねばならない。氏は實に善人である、善人良夫の心には誠實の神が宿り幸福の神が見舞ひ給ふのである。氏の全渾は確かに熱誠と忠實との凝りである。氏の眼中には攝陽商船以外に何物もない、氏の感念は十數年來の氏を支配した所の習慣天性となりて氏の心に結着してゐる。氏は極めて厚良の紳士である而も社交、智識、才能は氏の天品として氏に授けられてゐる、氏は人格に於いて海運界の第一位に居り、亦事務手腕家として適材の人たることを認められる。

山田久太郎氏

南海鐵道株式會社
總務部庶務掛長

天下何れの地か名物男ならむ、唯能く此の名物男に依つて社會に功を貽す、以て愛用や盡きたりと謂ふ可し。郊外電鐵界の名物男と云へば先づ第一に南海電鐵の山田久太郎氏を指すであらう、事實業界に於いて南海の山田と云へば誰れ知らぬ者なきほど業界の名物男である。氏は總務部庶務掛長として貫録、實力、手腕と識見を有し人材雲の如き總務部内を完全に統一しつゝある腕の人、力の人であると共に圓滿なる人格者である。溫雅にして高潔淳良にして淡快、宏濶にして謹嚴、人を卑しまず、自づから高うせず、策を用ひて人を損はず、術を用ひて己れを利せず、常に正々堂々公道を直歩して未だかつて權道を行かす、邪智を踐まず、宛として高士長者の風がある。

元來氏は負けず魂ひの無遠慮の意氣潑瀾たる人で相當の識見もあり、辯舌も確かなもので人と議論する場合は先づ對手方に充分熱を吐かして置いてしかして後にその要所々々にピシ／＼とキメ付けて行き、而かもその態度は全く小面嫌い位いドッシリと落着て居る處なんぞは實に堂々たるものである。氏が南海へ入社してから最早二十有餘年になる、現業から振出し本社に在りて人事保健掛主任、運輸部庶務掛長、所謂電鐵會社としては其必要なる階段を一ツツ順序よく經て來て居るから社の内外事、何一つ知らぬ事がない、實に南海の生字引として重寶がられてゐる。夫れに頭腦が頗る明敏で體力が強健であるから事務を處理することも捷く不眠不休で働いても平氣である、一年三百六十五日と云ふが氏が一年確かに五百日働き、社務に精勵してゐる。斯う云ふ人物は得て部下に對して冷靜なものであるが氏は業務に忠實なるだけ能く部卜の業務を理解し同情を以て接してゐる。であるから手腕に依つて用ひ、智腦ある者に依つて擢くと云つた風に其進路を開いてゐるやうで社の内外頗る人望が高いのは此の美風あるに由るのである。

吉田卯之吉氏

南海鐵道株式會社
運輸部旅客掛長

奮闘主義は現今時代風潮の一として到る處に歓迎せられつゝある所のものであるが、殊に競争角逐の尤も酷烈なる電鐵界では一日たりとも半時たりともこれなくてはならぬ必極の道具として苟も偉大な成功を夢み高遠なる志望を描くもの總てが多量に抱懐しつゝある思想、理想といふ事が出来るのであるが言ふは易く行ひは難い世の習い、折角高遠にして偉大なる精神を持って居つても偕て實行するものは非常に尠ない。理想的に奮闘したるものは稀有で恰も天空に輝く星の多き内に最も光輝を放つ一等星は僅かに其幾萬分の一なるがやうである。

この多かるべき理想的の活動兒として我が南海鐵道株式會社運輸部旅客掛長吉川卯之吉氏を挙げたいのである。氏は大南海の旅客掛長として縦横無盡の快腕を揮つてゐる、社内は勿論沿線の人達から非常に信認と尊敬を拂つてゐる氏が頗る明敏な頭腦の持主であると同時に能く事理を解し事物に當つて觀察力、判斷力の非常に強い人であるから、沿線周旋宣傳には斷然新らし味を出し素晴らしい腕を見せ、近時メキメキと南海が進出し他の群小郊外電鐵を壓して鮮かなる手腕を見せてゐる、のみならず従來南海沿線の一部の有志の間に妙な感情が潜在してゐたが氏が旅客掛長に就任するやアノ明朗な性格と至公至平の態度がスツカリ沿線の人達の感情を和らげ和氣霽々として沿線と南海がガチツと握手してゐる。而かも氏が度量宏濶にして開放的である。人に對して上下貴賤の別を設けず應接慇懃を極め、實に温顔、温言對者に春風駘蕩の感を抱かせる。かゝることは吉川氏のみにゆるされた人格の賜である、眞に沿線對南海との調和劑となつてゐる。現在南海の人達は何れも皆無くてはならぬ人々であるがとりわけなくてはならぬのは我が吉川掛長である。蓋し南海に氏を有することは恰も海軍に超弩級の戰艦を有するが如くあり、又沿線の幸福である。

川村謙吉氏

南海鐵道株式會社
總務部會計掛長心得

川村氏は温言春風の如く温容玉の如しも古いが風彩堂々として人格高く而かも頭腦明晰にして恰も快刀亂麻を斷つ
の手腕を有し、雄節夙に信義を重んずる實に我が電鐵界に稀に見るの人物である。

氏は基礎の鞏固と信用の宏大を以て我が電鐵界に君臨する寺田甚吉氏を社長とする南海鐵道株式會社總務部會計掛
長の心得である。而して同社に缺く可からざる有用の器材たりしものが實に川村謙吉氏である。曾つて某重役は余に
語つて曰く

『川村氏の如き會計掛長は資本家の方にて平身低頭、手を合して金の番人に頼むなり、何となれば資本家なるもの
は自己の資本の一日も有利に且つ安全に活動することを望む。然るに川村氏の如き人に託すれば此の目的が完全
に達せる』

と人間の信用も此處に至れば人以上のものである。而り某重役の言の如く氏が眞止銘正直者である、會計掛長心得に
就任以來得意の手腕と鮮かなる社交を以て非凡なる實力が益々異常の成績を擧げて居る、其手腕の非凡を愈々認めら
れ、爲めに同社は勿論業界に於いても頗る信望、徳望の厚きは更に偶然とする處でない、而して之れは決して過賞で
もない、一度氏の風容に接したるものは必ずや余輩なき推獎するヨリ以上のものを感得することは更に疑はない。

余は東洋の電鐵王大南海の臺所に氏の如き清廉潔白、人格崇と横溢せる霸氣、才氣に富む掛長を得たことを大南海の
爲め衷心欣び、しかして氏が南海のみならず業界の異彩たらしむるあるを確信すると共に其期の速かならん事を切に
期待するものである。

安藤正純氏

衆議院議員
政友會總務

安藤正純氏が夙に自由主義を唱道して國民を覺醒して政治思想の喚起に力め、今や政友會の領袖として重きを政界に成し、志氣雄邁器識超卓、組織ある政見を有し、順序ある經綸を抱き、常に眼を邦家の大局に注ぎ、區々たる小是非を争はず、天下の事を以て自ら任ず、其の抱負の偉大にし、自信の深き容易に得易からざる士なり。宜なる哉、多士濟々たる政友會に在り巨然とし、其大を爲してゐる。

氏は明治九年九月東京に生れ、東洋大學及び早稻田大學政治科を卒業、大阪朝日新聞記者となり後、東京朝日新聞に轉じ同編輯局長に進み、大阪、東京朝日新聞社取締役就任、大正九年以來衆議院議員に當選する六回、其間寺院境内地讓、興審査會委員、宗教制度調査會委員、並に警保委員を被仰付歐米各國及び支那を視をなす、田中内閣の文部參與官、犬養内閣の文部政務次官に任せらる。

氏の其專攻は社會政策である、氏の政界に於ける大なる功績は貴族院改革と普選斷行にある、普選と貴華運動當時余は西日本に二十一萬五千の會員を有する西日本普選聯盟、全國貴華聯盟理事として常に氏及び故山口義一氏等と往來し今尙安藤氏と親しき間柄であるから氏の人物を能く知つて居る。氏の位い正論を主張して屈せず、純真なる主張堂々たる言論は實に立法府の權威となり、政友三百の議員中氏の右に出づる議員果して幾人あるか近き將來には必ず大臣として國政を料理する時も遠くあるまい。

昭和十年八月二十日印刷
昭和十年八月二十五日發行

複製
嚴禁
(載 轉 禁)

著者 原 靜 村
大阪府岸和田市沼町一八五番地

發行人 原 德 太 郎
大阪府岸和田市沼町一八五番地

印刷所 南 海 新 聞 社
大阪府岸和田市沼町一八五番地

發行所

南海新聞社

大阪府岸和田市沼町一八五番地

368

215

終